彌吉の方で驚いた。

「そりやあ、斬りつけられた時あ誰だかわからなかつた。が、二度目に飛びかゝつた時あ、ちやんとお前だつてことがわかつてゐたんだよ。だからおれあ、あの時いつた。——おれを斬つて、どうしようていふんだ、と。お前、おぼえてゐるか？」

「……」

「彌吉、お前は惣右衛門にたのまれたな。」

「そ、そんなことまで……？」

思はずあげる彌吉の顏を、龜藏はさらに穩やかに笑ひながら見やつて、

「みんなわかつてゐる。おれあ、お前のつくつた海士の首を見た。そして驚いた。たしかにあの顏にやあ、水の中つて氣分が出てゐた。それですぐ、お前が隅田川で救つたつていふ惣右衛門の娘だつてことを考げえたのだ。そのうちお前は家をあけはじめた。いま〻で堅かつたお前だが、こいつあ女ができたんだなと考えてゐると、あの晩の騷ぎだ。——それで相手の女つてなあ、惣右衛門の娘だとすぐ感づいた。お前はあの娘に惚れてゐたんだ。會ひたくなつた。柳町のあたりをブラついて、うまくその娘とでくはした。お前の男つぷり、そして生命の恩人——娘の方でも

惚れるなあ當り前だ。はゝゝゝ。それから毎晩の首尾をきめる。惣右衛門に嗅ぎつけられる。そして惣右衛門は、お前にいつた。娘をやらう。だが、龜藏の生命と交換にだよ、と——」

「親方……」

彌吉はふたゝび疊へ額をすりつけた。

「どうだ。おれのいつた筋書どほりだらう？」

「恐れ入りました！　親方の眼力に狂ひはありません。親方！　御成敗くだせえ！」

「だが……なぜ、おれを殺さなかつた？　あの時あ蚊帳で自由にならねえおれのからだゝつた。みんなが駈けつける間に、もう一突きや二タ突きはできたはずだ。さうすりやあ……」

龜藏はまたするどい眼で彌吉のあげる顏を見た。

「親方、お聞きくだせえ！　あつしにやあそれができなかつたんです。二度までは夢中に飛びかかつたが、親方のあの苦しい聲を聞くと、あつしの惡心はハツと醒めました。長年の恩義のある親方へ、戀の迷ひのために刄物をむけるたあ、なんてえやつだ！　と、あつしの心があつしの手を叱りつけやした。——なに食はねえ顏をしてもどつて來て、親方の傷を介抱したあつし——あすまねえことをしたと後悔いたしました。戀なんかなんだ。手前勝手な不埒な眞似だ！　と、

その時、プツツリ思ひ切つてしまひました……」

「まあ、いゝ。なにもいふな。人形はできたんだ。龜藏一世一代の人形はできたんだ。おれあこれで人形をつくらうたあ思はねえ。人形師冥利にかなつた仕事をしたからにやあ、思ひ殘すこたあねえ。……さ、一杯やれ。」

龜藏は强く命令するやうに杯を突きつけた。

「親方、御成敗を！」

「この杯が成敗だ。はゝゝ。苦え酒でねえやうにのんでくれ。」

「親方……」

「彌吉。お前はどこまでもおれの弟子だ。たつたひとりの弟子だ。龜藏の仕事を繼いでくれなきならねえ大事の弟子だ。」

「おゝ、親方！」

感きはまつたやうに、彌吉は膝行り出して杯をうけた。彼は泣いた。子供のやうに聲を立てゝ泣き入つた。

お祭吉日

九月十五日——江戸名物の神田祭の日がきた。六十町内の氏子、三十六番の花車、そして將軍家がわざ〳〵吹上物見で上覽されるといふほどの、華麗と豪奢を競つた大祭禮である。

「彌吉、見にゆかうぢやあねえか。」

龜藏はいつた。

「え、行きませう。親方の人形がどんなに江戸中の評判になるか、はやく知りてえもんです。」

彌吉は勇み立つた。

ふたりは簡單に支度して、男世帶の氣樂さ、戸に鍵をかけるなりブラリとそとに出た。

着飾つた人々で身動きもならぬ雜沓——それをやうやくにくゞつて、神田明神を參拜した。

「親方、あぶねえですよ。あつしにつかまつて。」

と、彌吉は右手のきかぬ龜藏が、ともすると押し倒されさうになるのを氣遣つた。

「大丈夫だよ。さあ裏へぬけよう。」

龜藏は、湯立所の横から女坂を降りた。美々しく定紋幕を張りわたし、欄に緋毛氈をかけた町

家を振りむきもせず、ズン〳〵昌平橋をわたつた。

「親方、どこで花車を見ようつていふんです？」

いぶかる彌吉を、龜藏は輕く微笑しながら、

「まあ、默つてついてこい。」

そのあたりもかなり雜沓だつたが、龜藏の歩調は、妙に意氣込んで、人々を縫つて進んだ。

「あゝ、親方！」

彌吉はびつくりした。龜藏がたちどまつたのは、格子づくりの大きなしもた屋風の構の門口——柳町の惣右衛門の家であつた。

「さ、はいらう。」

龜藏は振りかへつた。

「親方……どういふわけで……？」

と、いよ〳〵面喰ふ彌吉の手を、龜藏は無言のまゝつかんで、戸をあけた。

「根津の龜藏ですつて、さう傳へていたゞきてえ。ぜひお目にかゝりてえと、ね。」

取次にでた弟子らしい男に、彼は丁寧に一禮した。男はひつ込んだが、すぐ奥の方で、なにや

らもの騷がしい氣はひがした。

と、龜藏は、彌吉に目くばせのやうな一瞥を與へたと思ふと、もう案内も乞はないで上へあがつた。ツカ〳〵と座敷の方へあるいた。たゞごとではないと察した彌吉、龜藏の身をかばふやうにいそいであとからつゞいた。

「やつ、待つてくだせえ！　惣右衛門さん。おれあ今日は、折入つてお願えにきたんだ。おれの方からこのとほり頭をさげて——な。そのほかの用ぢやあねえ。」

仕返しに乘り込んだかと思つて、鑿や小刀や鐵槌を五六人の弟子にもたせ、殺氣立つてゐる惣右衛門の前へ、ピタリと龜藏は坐つた。

「どうぞ、おれとお前さんとこの彌吉と、三人だけの座にしていたゞきてえ。おれあ見かけなさるやうに、片腕しか動かなえからだだ。また彌吉にしてもお前さんに、手出しができようか。しづかに話を聞いていたゞきてえ。」

——龜藏の眞實な態度に惣右衛門はやゝ落ついた。

「さうか。これやあこつちがわるかつた。はつはつは。どんな話か知らねえが、聞かせて貰ひませう。」

彼は頤で弟子達を去らしめた。

それから一時間ばかり、閉め切つた座敷に三人の低い會話がつゞいた。

「――わるかつた！　龜藏さん。ゆるしてくだせえ。このとほりだ。」と、惣右衛門は座布團を跳ねのけ、疊へ兩手をついた。「お前さんの立派な心にくらべて、このおれつて奴あ、なんてえ見下げ果てた根性つ玉をもつてゐたらう！　おれあたしかにお前さんを憎んでゐた、妬んでゐた自分の手腕の及ばねえことを知りながら、手腕を磨いてお前さんと競りあふ事を考えなかつた。すまねえ！・このとほりお詫びする。罪をゆるしてくだせえ。」

龜藏は笑つた。

「なんの、惣右衛門さん。お前さんの手腕は江戸人形師の一流だ。おれあ一世一代をつくつたので心殘りやあねえ。もう一生人形をつくらうたあ思はねえ。この彌吉がおれの後繼者だ。おれの息子だ。その息子に、いまのお願え……聞きとどけていたゞけようかね。」

「そりやあ、こつちからお願えしてえくれえだ。」惣右衛門は手をたゝいた。出て來た乳母のお兼に、「おひさをこゝへ連れてこい。そして二階へ、すぐ酒宴の支度をしろ。」と、命じた。

祭禮で、着物もあらため、髮化粧に手を入れてゐる娘のおひさは、美しい上にも美しかつた。

高島田に搖れる銀の薄の簪が、いかにもういゝしく愛らしかつた。乳母から彌吉のきてゐることを聞かされたのであらう。彼女は驚きと歡びとにのぼせたやうに、座敷の隅に震へるやうに坐つた。

「おゝ、こりやあいゝ娘さんだ！」と、龜藏は首を振つた。「この娘さんからこんどの海士の人形ができたんだ。そして今日つからおれもこの娘さんの親だ。考えて見りやあ、惣右衛門さん、おれとお前さんたあ、敵同士になれる仲ぢやあねえんだよ。はゝゝゝゝ。」

自分の親になるといはれて、おひさは怪しむ眼をあげた。が、すぐ惣右衛門は讀み取つて、

「おひさ、この方あ根津の龜藏さんだ。お前と彌吉つあんと夫婦にしてえつて、おいでなすつたんだ。このお祭を吉日にな。」

「阿父さん！」

おひさは嬉し泣きに惣右衛門へすがりついた。

「花車だ！　花車だ！　連雀町の花車が來たぞ！」

往來の人々のどよめきたつ聲がした。

「おう、龜藏さん、お前さんの人形を拜見させていたゞかう！　二階へ。」

惣右衛門がまづ立つた。——

——「珠取の海士」と墨痕あざやかな大旗を框仕立にかつぐ人足をまつさきに、裃姿の旦那衆懸聲いさましく綱をひく派手な揃ひ衣裳の若い衆、二頭の大牛に曳かれて、緞子で縁取つた大きな花車がギーツと車のきしむ音も重々しく動いてきた。町の兩側の人垣から、驚異と感嘆の聲がドツとあがつた。

「なるほど！　龜藏さん、こりやあ一世一代の人形だ。いや、立派なもんだ！」

惣右衛門は心からの尊敬をもつて、龜藏に頭をさげた。

「難有う！　誰にほめられるより、お前さんにほめられたがうれしいよ。これであの人形も極め附になつた。」

龜藏はすつかり滿足して挨拶を返へした。

さうしたふたりのうしろから、彌吉とおひさは、いつの間にか肩と肩をすりつけるやうにならんで、嬉しげに花車をのぞきおろしてゐた。

笑はれ彌三郎

「板倉政要」卷三を見ると、もし私事の遺恨によつて、親の敵と號し、みだりに人を殺害した者は、辻切强盜の法に准じて死罪に行ふ旨がしるされてある。元和年間、京都の名所司代と稱せられた板倉重宗の取りきめた掟であるが、さすがに烱眼明察の人で、かうした贋の仇討は、かなりあつたらしい。

家康の「百箇條遺訓」によつて、仇討は公許され、むしろ賞讃されたのであるから、これを種々に利用惡用した輩はあつたにちがひない。「半日閑話」卷一には、繼父を子が殺して、これは實父の仇討であると申し立て、目下（文化十四年）取調べ中だといふ聞き書がのせられてゐる。そのほか「梅翁隨筆」や「藤岡屋日記」なども、ずいぶん理由を疑ふべき仇討の話を傳へてゐる。

おなじく贋の仇討にしても、なかには本篇のごとく、仇討に出發しながら、目的を遂行するの自信なく、通りがかりの旅人を殺害して、その首の腐つて、誰だかわからなくなつたのを持つて歸つた場合もあつた。なにしろ相手が行方をくらましてをり、これをあの交通不便な時代に、なんらの警察力を借りずして探し出すのであるから、容易な苦勞ではない。つひには苦勞負けして、いゝ加減な贋首を持つて歸つて武士の面目を保つたこともあつた。眞の相手がその首はちがふと名乘り出るわけはないから、この點は大丈夫である。「文政雜記」卷一は、奥州祝田濱で行はれた仇討が、四十一年目に本懷を達したといつてゐる。かうなると討手の辛抱强さよりも、敵の相手がよくうまいこと生きてゐたものだと考へたくもなる。

本篇の事實は享保頃の寫本から得たもので、多少の小說的脚色はゆるして頂かう。

敵の身替

「うわつ！」

思ひがけない袈裟がけの一刀に、虛空をつかんでのけ反る老爺――飛びかゝつてとゞめを刺しながら、平馬は眼をつぶつた。

（ゆるしてくれ！　老人。わしは卑怯者だ。卑劣な人間だ。たゞ道連れになつたお前を、かうして騙し討ちにして……）

彼は松の根がたにころがつた死骸へ頭をさげた。

（ゆるしてくれ！　老人。わしは仇討して歸らなければ、家名を繼ぐことのできぬ身なのだ。たつたひとりの母上は鄕里でわしを待つてゐられる。目出度く仇を報じて歸國するわしを待つてゐられる。妹のお浪も待つゐる。そして……わしは所詮あの梶木玄龍を討つことではきない。玄龍は名に負ふ劍法の達者、わしは生來の虛弱、勝負ははじめつからわかりきつてゐるのだ。あゝして彌三郎が妹と許婚の緣、わしの親しい友といふことで助太刀に立たうと言ひ出してくれたればこそ、母上も安堵されたのだ。彌三郎の鋭い腕は、藩中の若手にならぶ者もない。彌三郎さへつ

いてゐればと、妹もよろこんだ。そして……その彌三郎は、わしを棄てた。大阪からいよ〳〵船出ときまつた日に、あの女と姿をかくしてしまつた。……わしのためには、うれしい戀人であつたあのお千勢と……仇討を濟ませば、かならず妻にと誓つたあのお千勢と……)

平馬は輕く齒がみをした。

(……わしは、しかし船に乘つた。四國へ渡つた。あの時のわしは、父上の仇を報ずるといふ心よりも、戀を奪はれた憤りと悲しみに、身も心も燒きつくすやうだつた。かなはぬ相手とは知りながら、敵のゐるといふこの阿波へ來たのは、むしろかう絶望した自分を、敵の前にさらして、返り討に生命を縮めたいと思ひつめたからだ。……が、わしには家名を起さなければならない大きな責任がある。なんとしても玄龍の首をもつて歸らなければならない。無駄死してはならぬ。母上の嘆き、また彌三郎に裏切られた妹の嘆きをなぐさめる者はわしよりほかにはない。滅多には棄てられぬ生命……だが、わしの力は玄龍に遠くおよばぬ。それで、かやうな……かやうな卑怯とも卑劣とも罵られていゝ眞似を敢てしたのだ。道連れになつたこの老人が、玄龍の相貌にまつたくよく似てゐたこと……あゝ、老人、ゆるしてくれ。菩提は必らず弔ふであらうから……)

平馬は三たび、頭をさげた。

強い苛責の心に、彼はブルツと震えた。あたりを見まはした。多度津を離れた屏風浦――やはらかな砂地松並木に冷たい二月の海風が吹きつけて、南方、天霧山、彌谷山には灰色の雲が毛ばだつてゐた。

「ゆるしてくれ!」

口に低く念佛して、彼は死骸の首を斬りおとした。

善通寺へゆくのだとといつてゐた。八十八箇所のお遍路を、これで七十五番まで濟すことになるのだとホク〳〵してゐた。――平馬はそこに紐が切れてころがつてゐる菅笠を見た。「本來無東西、何處有南北、迷故三界城、悟故十方空」と書いた間に、「尾張國知多郡半田、伊兵衛」と書いてあつた。

「ゆるしてくれ!」

彼はまた合掌した。信仰に生きやうとしてゐる。無力の老人を、非道の刄をかけたことがいかにも心苦しかつた。血に染つた白衣、胸の下からはみ出してゐる札挾み、杖、雨具の藺莚面桶のはいつた雜囊――彼は、更に「ゆるしてくれ」を繰りかへした。

すべてをひとまとめにして、死骸をひきづりながら海のはうへゆく――

あたりはとつぷりと暮れかゝつて、やゝ荒れ模様の浪は、轟と高鳴りしながら碎けてゐた。

鹽漬けの首

首は鹽漬けにはしたが、しかもその相貌をなるべく自然らしく崩すため、平馬はわざと日數をかけて備前へ渡つた。丸龜で仇討の屆け出をなすべきが順當であるが、この事情ではそれが出來ない。彼は自分の仕へる松江藩と岡山藩とが、當時多少の確執をもつてゐることを知つてゐた。で、四國を隅なく探し廻り、ふと敵が再び本土にもどつて、倉敷に入り込んだとの噂を耳にし、後を追つて首尾よく討ち果したのだといふことにした。岡山藩では松江藩の者が屆け出をしても面倒が起りやすゐからそのまゝ首をもつて歸つたのだといふ口實をつくつた。

「卑怯だ、卑劣だ！　――が、しかたがない。」

彼は、ともすると胸を締めつける良心の咎めだてを押へつけた。

「天晴れだ。倉橋。わし達は常日頃貴公の虛弱をわらつてゐたが、この度の手柄。いや、まつたく見損つてゐた。」

「うむ、實によくやつた。矢張り一念一心だ。劍法といふは畢竟業だけのこと。なんといふても

大事なは精神だ。精神あつて業は生きる。いや、精神はあらゆる術の上にあるもの――その證據を倉橋、お前は立派に示してくれた。」

「それにつけても、守田は武士の風上に置けぬ奴だ。助太刀の役を自らもとめて立ちながら、大阪表に滯在中、女をこしらへて逃げ出したといふではないか。友人たるの信義にもとつた怪しからぬ奴だ。」

「いや、そればかりではない。守田は倉橋の妹と、婚約までとゝのつてゐたのだ。あの溫篤なお浪殿を、素性も知れぬ茶屋女に見返へるとは、なんたる輕薄無恥な奴だらう。あの意氣に強く分別に長けた守田が……一體、そのお千勢といふ女は、それほどの美人だつたのか？」

賞讃される自分また反對に口をきはめて罵言される彌三郎――この二つの言葉を、毎日のやうに平馬は聞いたのであるが、そのたびに心苦しかつた。

彌三郎よりも、わしのはうがもつと卑怯卑劣な人間だ。彌三郎はあの女と逃げた。わしを棄て妹を棄てゝ逃げた。が、彌三郎の戀は一圖のものだつた。彼は自分の名譽も栄達も一切のものをあの戀に賭けたのだ。武士道から見れば笑はれていゝだらうが、人間の眞實から見れば、なんの嘘僞りもなかつた。だがわしはどうだ？　わしは非道にも罪なき老人を殺したのだ。それを敵の

首だといつて一藩の眼を昏ましたのだ。わしこそ武士道の上からも人間の眞實の上からも、ゆるすべからざる男だ。人非人だ！）

平馬はたゞひとり己れを罵り己れを虐んだ。苦悶の日を送つた。母や妹を喜ばせなぐさめる目的こそ達したが、その母の晴れやかな滿足と妹のしとやかな納得とを見るにつけ、心の中に責めらるゝものは益々多かつた。

そればかりではない。再び家名を興し、父の跡目を繼いで、君侯の御覺えも目出度く、次第に役を拔擢されるやうになつてから、焦慮と不安がいよ〳〵募つて來た。

（敵梶木玄龍は生きてゐるのだ！　どこかにうろついてゐるのだ！　それがもし曝露したとしたら……？）

彼は切腹しても及ばぬ恐ろしい罪を思つた。さうした時の一家の悲慘な運命を想像すると、居ても起つてもゐられなかつた。

そのうちに、彼に緣談が起つた。藩中での勢力家である諸島重右衞門が、娘のお律を嫁に貰つてほしいといふ申込みであつた。母のお貞は、どんなにかよろこんだ。美しくて諸藝に秀でてゐるあの娘——諸方から降るやうにある緣談を押しのけて。しかも先方から頭をさげての賴みであ

る。これほどの名聞はないといつた。彼の苦惱は更に〳〵たかまつた。お千勢——あの娘はまづ自分の戀した女だつた。初心で可憐で、あゝした茶屋女とは思へない娘だつた。自分がかりそめの病氣にかかつた時も、暇を見ては宿まで來て介抱してくれた。しかもいつしか二人は將來を誓ふ仲となつた。それを彌三郎が横合から奪つてともに出奔したのである。叛いた女、裏切つた女——自分は彌三郎よりも彼女を呪つた。が、それでも彼女は忘れられない記憶となつてゐる。憎い女、恨めしい女、今はなんの未練もないのだと、心に罵つてはゐるのだが、それでもひとりジッと坐つてゐる時、なにかと胸に浮ぶのは彼女の姿である。無論、このことは母にも妹にも打あけてはゐない。ゐないが——

「平馬、このやうな結構な話はまたとあるものではない。諸島樣は、お浪にも丁度よい婿があると仰有つておいでなのだよ。關愼太郎殿——諸島樣は伯父御にあたつておいでなされる。お律どのとは從兄妹——そこへお浪が片づけば、倉橋、諸島、關の三家は重緣も同樣緣の深い目出度い話じや。お浪はこの緣談を承知しました。わたしはあの娘に彌三郎を見返へしてやるやうな婿を取らなければと思つてゐた。それが幸ひこんな有難い話になりました。ほんとうにうれしいことです。お前が立派に父上の仇を報じて歸つて來たからこそだと、今更ながらお禮をいひたいので

す。」

——なにも知らない母は、たゞもうよろこびにあふれてゐた。

そして平馬とお浪との婚儀が、日を同じうして行はれたことも、藩中での珍らしい語り草となつた。

それから三年が夢のやうに過ぎた。平馬はたしかに幸福だつた。妻のお律は美しく賢かつた。お千勢のことなどいつしか彼の胸から忘れ去つた。そればかりではない。彼の心を苦しめた仇討の一條も、この間の「時」がすつかり彼の記憶を麻痺してくれた。妹のお浪もまた幸福だつた。婿の愼太郎は氣慨と分別をもつた若く頼もしい武士だつた。——倉橋一家は、謂はゞ萬々歳だつた。

——と、丁度その三年目の春、平馬は藩主の參覲出府に隨つて、江戸へ下ることとなつた。いまでは、あの彌三郎に代つて、彼の義理ある兄弟となつた愼太郎も一緒だつた。

捨てた女

「鐘一つ賣れぬ日はなし」といふ江戸の廣大と繁華とはめづらしかつた。平馬と愼太郎は勤務の

暇を見てはうち連れだつて諸方を見物した。兩國、淺草、向島、上野のあたりは、花見時分といふので、第一に足を向けた。

「今日は芝の方角、まづ東照大神宮の結構を拜觀して增上寺から高輪の泉岳寺、歸途を愛宕山權現に詣でやうではないか。品川まで參れば澤庵和尙の東海禪寺、紅葉の名所といふ海晏寺などがあるが、それでは夜にもならう。また季節からいつてあのあたりは夏から秋の散策の樂しみに殘して置かう。」

愼太郎は江戸名所圖會によつて、一日の豫定を立てゝゐた。

「よからう。」

平馬は面白げに微笑した。

——山門の高莊、宗廟の華麗に驚き、四十七士の墓所に香煙の絶えざるを嘆じ、ゆつくり道をとつて愛宕山の男坂の石段を登つた時は、やゝ日が沈みかけてゐた。

「なるほど高い。六十八段ある。これを一氣に馬上で駈け登つたといふ曲垣平九郎は達人だな。たしかに武道の譽と言つていゝ」と愼太郎は首を捻つた。「武士と生れた冥加に、なにかの手柄は立てたいものだが、劍法槍法殘念ながらわしの術では及ばぬ話だ。」

「それはわしも同じ事だ。」

平馬は笑つた。

と、愼太郎は振り返つて、

「いや、さうでない。平馬殿はあの玄龍ほどの人物と戰つて、見事仇を報じられた、一藩の尊敬を身にあつめられた。武門の面目を立てられたのだ。」

「……」

平馬はギョッとした。しばらく忘れてゐた仇討の話、玄龍の名を耳にして、例の自責と焦慮とがおほひかゝつた。不安らしく彼は沈默しなければならなかつた。

その一瞬の表情に、愼太郎は氣づきもしなかつた。氣づいたとしても、平馬の功に誇らぬ謙虛な心が口をつぐませてゐるのだと考へたに相違ない。

「だいぶの道程を歩いたので、ちとくたびれもした。どうやら空腹にもなつたやうだ。あの總門を出たところには、掛茶屋がならんでゐたやうだが、あすこに休んで、茶でものもうではないか。なにか餅菓子の類はあるだらう。ふたりとも甘黨だ。酒とちがつてちと意氣地なしにも見え意地ぎたなくも見えるが、なに構ふことはない。」

愼太郎は元氣に笑つた。——彼はお浪を娶つた緣からいへば、當然平馬を兄として呼ばなければならないのだつたが、年齡は平馬を二つ上の三十一歲だつた。で、兩人は互ひに「兄上」呼はりをやめて、むしろ友達のやうに、なにごとでも話しあふ癖がついてゐた。そしてそのはうがかへつて强い親和を示すことにもなつてゐた。

平馬もやうやく氣分を恢復した。

彼等は肩を並べてうち興じながら、こんどは平坦な女坂を降りた。

「ゆるせよ。」

總門を出て堀割の小橋を渡ると、すぐ左手にあつた葭簀掛の茶屋へ、愼太郎はズッとはいつた

平馬も續いた。

「いらつしやいまし。」

繻子の襟つきの着物に淺黃の前垂——小ざつぱりした扮裝の女が頭をさげた。急いで床几へ茶をもつて來た。——

「あ！」

愼太郎から平馬へ盆を差し伸べた女は、低い叫びを呑みこんだ。

「――おゝ！」

平馬も思はず茶碗を落さうとした。

色の白い、眉のしなやかに濃い、そしてやゝ蓮つ葉に輕く動く瞳、肉づきのいゝ括り頤――

「まあ、こんなところに石つころが――粗相いたしました。御免くださいますやうに。お袴をおよごし申しはいたしませんでしたか。」

「いや、わしの放心ぢや。」

平馬は咳にまぎらはせるやうに、取つてつけた笑ひを笑つた。

茶　椀　酒

「……ふむ、さうか。平馬に會つたのか……」

「まつたくびつくりしたよ。まさか、あんなところでお目にかゝるとは思はなかつたからねえ。」

「……平馬がそんな立派な身なりで江戸に來てゐるとは……やつぱり噂に聞いた通り、四國へ渡つて玄龍を討ち取つたのだな。あの虚弱な人間が……。梶木玄龍と言へば一刀流の達人と呼ばれた人物、たとひ五十を過ぎても、まだ〳〵腕に衰へはない筈だが……。連れの武士を、平馬は慎

太郎と言つてゐたのだな……？」

「あゝ、さうだよ。……たしかに平馬さまはさう呼んでおいでだつたよ。」

「慎太郎といへば、關慎太郎だと思ふが……その男は、平馬とちがつて屈强な、眼の大きな男だつたらう？」

「あゝ、さうだよ。その通りだよ。おふたりはいかにも仲がよくつて、ちようどむかしのお前さんと平馬さまのやうだつたよ。」

――芝車町裏、俗に大佛裏といはれてゐる長屋建の奥まつた一軒。煤けた行燈の傍らに、脚のガタつく膳を出して、せつ貧たらしい鯰の煮つけと酢貝の二皿。チビ〳〵手酌で女房の話に聞き入つてゐる男――

「……ふむ。」と、彼は自ら嘲るやうにひとつ肩をゆすつたが、「平馬が、そんなに立派な武士面であるいてゐたのか……」

「ほんとうに立派だつたよ。羽二重の紋附が、あの色の白い顔を、ほんとうに綺麗に見せた。隣りの茶屋のお絹さんが、竹三郎の志津馬のやうだと、あとで大騒ぎしてゐたよ。」

「竹三郎とはなんだ？」

「中村座の役者なんだよ。美い男なので、大評判だつていふ。」

「ふむ。役者か……河原乞食か。」

彌三郎は鼻先で笑つた。

「なんと言つてもほんとうにお立派だつた。あの頃はいろんな御心配もあつたらうし、お窶れだつたが、今日お目にかゝつた平馬さまは、ほんとうにお綺麗でお立派で……」

「お千勢。お前はもと〳〵平馬が好きだつたな。いや、平馬とは言ひかはしてさへゐた。それを俺が横あひから、無理にお前をつれ出したのだ。しかも、四國へ船が出るといふ前の晩に……考へて見れば、あのまゝで行つたらお前はいま平馬の女房になつてゐたところだ……平馬は眞實な男だ、嘘をいはぬ男だ。きつとお前を女房に持つたらう……」

「平馬さまは、もう立派なとこから奥さまをお迎へだらう。」

お千勢は呟いた。

彌三郎は、茶碗酒を下に置いた。或るするどい眼をヂロリと彼女にくれた。

「平馬に女房がなけりやあ……どうだ？」

「どうだつて、なにがどうなの？」

「わかつた言葉を聞きかへすな。」

「……しかたがないねえ。」

「しかたがない？」

「今更、ねえ。」

「今更？　今更だつて話のつかないことはないぞ。——平馬は、松江の下屋敷にゐるにちがひない。松江の屋敷は小石川水道端だ——」

「もうそんな話はよしにしようよ。」

執拗くなつて來る彌三郎へ、お千勢は舌打ちした。

「ふむ。お千勢。氣の毒だな。お前は出世しそくねたな。俺はかうして貧乏浪人——二度と祿にはありつけない生涯の貧乏浪人だ。不信不義、卑怯卑劣と罵られて、守田彌三郎では世間に顔向けのできない。武士道の廢つた人間だ。俺と一緒にゐる間は、お前は掛茶屋の女でゐなきやあならないのだぞ。」

「……」

お千勢はもう返事をしなかつた。ぢれつたさうに櫛で前髪のあたりを搔いてゐた。

——江戸へ出て役にもつけない彌三郎、そして當然の貧しく暗い生活。それが彼の性格を日に日に自嘲自棄的にさせたことは爭はれなかつた。またお千勢も、以前の初々しさ可憐さにひきかへて、いつしか放縱な、强情な——淫蕩らしい女になつてゐた。

その夜から兩人の間には、疑惑と反感との稜々しい言葉が應酬された。時には彌三郎の拳が飛んだ。お千勢のふて寢が續いた。

「平馬が戀しいだらう？」

「あゝ、戀しいねえ？」

「平馬だつて、いま頃、貴樣のことを考へてゐるだらう。」

「さうだつたら嬉しいねえ！」

そんな冷一語、熱一語が、睨めつける眼と眼の間に、よく癇走つた。——

或る微笑

魚籃坂下のと或る煮賣屋の繩暖簾をくゞつて出たのは、彌三郎だつた。今日もお千勢が働きに出がけの時、もう一度でいゝから平馬さんが愛宕詣りをしてくれゝば嬉しいといつた棄て臺辭か

ら喧嘩の花が咲いてむしやくしや腹に、自分も家を飛び出し、したゝかそこで酒をあほつたのであるが、醉ひつぶれて床几の上にひと眠り、亭主が搖りおこしたのにいひがかりをつけて、飲み倒しも同樣、そとによろけ出したのであつた。

「——？」

と、彼は、やゝ日の暮つた彼方に、思はず眼を据えた。木刀を一本ブチ込んだ仲間を從へて、脊の高い半白總髮の身なりも立派やかなの武士——

「はて？　——似てゐる。いや、あいつだ。玄龍だ！　たしかに梶木玄龍だ！」

彼は驚いた。——怪んだ。

總髮の武士は氣づかなかつた。

「要助。急がう。山口殿の用事がちと手間取つた。門弟ども、わしの稽古を待つてゐるだらう。」

頑健らしい大股で、武士は振り向きもせず、ズン〳〵歩いた。坂をのぼつた。

「今日は外山樣が、代稽古をなすつておいでになりませう。」

仲間はいつた。

「いや、外山ばかりにまかせても置けん。」

どこやらに、野強い中國訛がまぢつてゐる。

「うむ。間違ひない。玄龍だ！　梶木玄龍！」

彌三郎はすつかり醉がさめた。なほ見えがくれにあとを追つた。――坂をのぼりきつて左に明王院といふ寺。その前に堂々たる門構への町道場。「一刀流指南、和泉逸丈」と筆太にしるされた看板――

「ふむ……」

彌三郎はなほよくうかゞつて、踵を返した。

「平馬は仇討したといふ。……が……あれは玄龍だつた！　俺の眼の曇らぬ鏡にかけて、あれは梶木玄龍だつた。と……すると……？」

或る邪惡な微笑が、見る〳〵彼の唇にのぼつた。

「はゝゝ。平馬！　貴樣は天晴れ出世したといふが……。もう貴樣の運命は、彌三郎の掌のうちのものだぞ！　はゝはゝ。お千勢のために、俺はこの摑んだものを放しはせんぞ！」

彼はグツと大きくうなづいた。――

白墨で描いたやうに光のない月を懸けた小石川第六天の森に、彌三郎と平馬とが向き合つて立つのは、その翌夜のことだつた。

「もう駄目だぞ。平馬！　もし生命が惜しいなら、江戸を立ち去れ。奥州蝦夷のどこへなりと失せ居れい。貴樣の身の上一切は、俺の手の内にあるのだぞ。」

威嚇するやうに、氣味よげに彌三郎は罵つた。

「お千勢にも會ふた。いつかはお前にめぐり會ふ日が來ると思うた。……わしは決してお前を恨んではゐぬ。それよりもお前を氣の毒に思うた。わしがこのやうにいつはりの出世榮達をすればするだけ、お前に對して濟まぬと心の苛責は絶へなかつた。……なにも隱さぬ、お前に見ぬかれた通り、いかにもわしは贋首を持つて歸國した。すべての人をあざむいた。殿も、同僚も、母も妹も……」苦しく、正直に、平馬は頭をさげた。「いや、さすがに彌三郎じや。よく見ぬいた。わしにあの玄龍の討てぬことをよく見ぬいた……」

「……で、貴樣は、諸岡の娘をもらつたのだな。そしてお浪は愼太郎方へ嫁入つたのだな。」

彌三郎は、玄龍に會つたことは話さなかつた。たゞ彼は自分の眼力で見拔いたにして置いた。そこには魂膽があつた。――今、玄龍の話をすれば、或は彌三郎が死物狂ひであの道場へ飛びこむにちがひない。また愼太郎が情を知つて、以前の自分に代つて助太刀をするかも知れない。愼

太郎の腕は自分よりもまさつてゐる。かうなれば仇討は眞實成就されるであらう。玄龍を失へば平馬の立場はどうにでもたくみに糊塗する道がある。玄龍が生きてゐれば、平馬の僞りは明白でしたがつてまた自分への非難も充分緩和することができる。——

「わしの出世は心の苦惱じや。たゞ、わしの僞りがわかつた時、母と妹は、非嘆といふだけでは濟まぬ筈。必らずふたりも自ら生命を絶つであらう。彌三郎、これだけが願ひだ。わしはお前の命じる通り身をかくす。一生身をかくす。が、それはわしがふと亂心でもして行方知らずになつたことにしてほしい。さうすればすべては闇から闇へ葬られるのだ。玄龍は今いづくにゐるか知らぬ。わしは改めてまた仇討に出やう。萬が一幸ひに玄龍にめぐりあはせ、萬が一幸ひに玄龍を討ちはたしても、わしは再びお前の前にはあらはれぬ。お前の心持はよくわかつてゐる。兄弟以上に親しんでゐたお前だ。わからなくてどうするものか。お前の氣象からいつて、お前とお千勢の前にわしの姿を見ることは不快だらう。わしは永劫お前には會はぬ土地へ身をかくす。たゞ母のため妹のために、この僞りだけはながい祕密として……」

平馬はガバと地びたに手をついた。

「よし、よし。それだけは聞いて置かう。」

「有難い。それでわしは江戸を去れる。……わしは、今までの僞りの大罪のほかに、その僞りの種にした首を弔はねばならぬ。わしは恨みもない老人を殺したのだ。その老人の名はいつもわしの胸から消えなんだ。尾張半田の伊兵衛といふ老人この老人の冥福を祈らなければならないのだ——」

「え。尾張半田の、伊兵衛といふ老人？」

彌三郎はなぜか驚いた眼を光らせた。なにかいはうとしたが、すぐ自分を制するやうに、まだ地に手をついてゐる平馬の姿を、ジッと強く見た。

罪ほろぼし

傲然たる勝利感と、すぐ次の瞬間、不思議にその感情の下から湧く或る混亂した氣分——それは、痛恨とも哀傷ともつかぬ氣分に驅られながら、彌三郎はあるいてゐた。——

——郷里もとの母、妹、妻に對して、それとなく別れの手紙を認めること、なに氣ない會話のうちに愼太郎へ後事を托すること、そのほか主家への用務一切を片づけて一生歸らぬ旅に出るからと、明日一日だけの猶豫を平馬は懇願した。自分はそれをゆるした。が——

（平馬の戀を奪つたのは誰だ？　平馬を裏切つたのは誰だ？　みんな俺ではないか？　しかも俺は不實な女を守るために、平馬の幸福さへ微塵に碎き去らうとしてゐる！　平馬こそ俺を罵つていゝのだ……）

彼の歩調はやゝ亂れた。

（平馬がその老人を殺したのは、平馬だけの罪なのか……尾張半田の伊兵衞といふ老人……おゝ俺はいつかお千勢から聞いた。お千勢の生國は尾張半田で、父は伊兵衞といつた……と彼女を江戸へ連れて下つた時、名古屋を過ぎる頃、彼女はたしかにさういつた……その父は、ちひさい時大阪へ自分を棄兒にして、行方知れずになつてしまつたと！）

彼はよろめいた。――

――夜更けて、彼は大佛裏の家に戻つた。

勝手に蒲團を敷いて、お千勢は、居汚なく眠つてゐた。枕元には寢酒でも飲んだらしく、德利がころがつてゐた。

ドカリと坐り込んで、彌三郎は堅く腕をくんだ。

自嘲と自責の、蒼白い笑ひが、強く彼の唇のあたりにうかんだ。

「俺は武士として果てたい！」

彼は低くキツと叫んだ。大刀を引き寄せた。

「うゝむ――」

一閃――ほとんど聲を立てる暇もなく、お千勢の首は枕の彼方へゴロリと轉がつた。蒲團の中で、彼女の四肢は殘る生命にのたうつたが、それに見向きもせず、彌三郎は家を飛び出した。

「――貴殿やまた平馬殿に、おめ〳〵面を會はさせる仕儀ではないが、拙者の卑怯卑劣をお詫びいたさなければ、心がすまぬによつて、恥の上の恥さらしに押して參上いたした。拙者はこれより御ふたりばかりでない、松江の御家中どなたにも一生姿を見せぬ場所へ旅立ちいたす。罪を許されよと乞ふのではない。いかようともこの後も彌三郎の不信不義をおわらひ下されたい。願はくは御健勝で……。平馬殿も、いつまでも松江家に御忠勤を勵まれるやう。立派に仇討された功名――それを汚されぬやうに――」

水道端の松江家の下屋敷、愼太郎と平馬とが、下男一人を使つて住んでゐる一棟へ、旅姿の彌三郎が訪づれたのは、翌日の朝だつた。彼は玄關の土間に、まるで審きでも受ける罪人のやうに

うづくまつてゐた。

「見るもけがらはしい！　歸れ！　行け！」

と、愼太郎は唾も吐きかけんばかり罵つた。が、平馬は押しとめた。

「彌三郎殿、拙者こそ……」

「いや、平馬殿。彌三郎はわが所業を悔ゐ恥ぢたればこそ、同じ江戸にとゞまれなくなつたのでござる。」

眼で制して、彌三郎はひたすら頭をさげた。

「武士は武士たる本分を失つた者に、言葉をかはす要を持たんのだ。歸れ！」

愼太郎は叱咤した。

默つて、そのまゝ彌三郎は去つた。

――同じ日の午過ぎ、芝魚籃坂上の劍道者、和泉逸丈といふものが、昨夜夜更けて闖入した一人の若い曲者に討果された評判を、町々に瓦版賣が觸れあるいた。

興味ありげに、松江の下屋敷でもそれを買つた者があつたが、逸丈は九州浪人と自稱してゐて素情もはつきりわからぬが、討ち果したのは盜賊でなく、なにか恨みによつたものらしいとしる

してあつた。壁に「拙者生涯の笑はれ者ながら、恥を思ひ起し候儘、誅戮に及び候」と大書してあつたと瓦版は報じた。その意味は誰にもなほさら謎のやうにわからなかつた。

火柱仁義

十代將軍家治の時代――といふよりも田沼時代と呼ばれてゐる田沼意次が執政の頃空前の天災地變が相ついで全國的に起つたことは、史上著名な話である。こと に明和から天明へかけては、諸方に、さながらの活地獄が出現した。

明和九年のごとき、江戸は大火と大洪水に見舞はれ、市民達は「明和九年」が「迷惑年」と通ずるといつて、御幣をかつぐに至つた。で、朝廷では安永とめでたい言葉に改元されたが、決して世は安く永くはなく、江戸には十九萬人も死者を出したほどの大疫流行があり、つゞいて大島櫻島の大噴火があり、三度び改元されて天明となつたが、御幣かつぎ連は、音が「天命」に通ずるからろくなことはあるまいと不安がつてゐた。ところがこの流言が不思議に的中して、諸國の大風害、關東の地

震、同三年には有名な淺間山の大噴火、ついで所謂天明の大飢饉となつた。

本篇はこの淺間山の地妖を背景とした一挿話である。當時信濃上野二國は、この災禍のため田畑がことゝく荒廢し、死者二萬人を出した。この事は諸種の記錄に殘されてゐるが、「譚海」によれば、「六月二十九日より信州淺間山震動して砂石をふらし、晝夜闇の如く雷電甚し（略）七月九日巳の時に至り俄に山つなみ起りて泥を卷き來る事十丈ばかりにて、信州上州人家田畑赤地に成たる所、凡横八里竪十八里に及べり（略）人家損亡して人の死骸手足きれ〴〵になり、流れて利根川の川上を埋め、かちわたりと成たり。硫黄の氣に川水濁り變じて魚悉く死し」云々とあつて、つゞいて飢餓におびえたる百姓等が諸方に暴動を起した顚末を報じてゐる。

榮螺爺い

「――なるほど！　こいつあひでえ！」

空腹と疲勞を忘れて、巳之吉は三度笠のふちに指をかけ、あたりを見まはしながら、眉をピク

リと動かした。

碓氷峠を越え、輕井澤へ出ようとした彼の眼に映つて慘狀は、噂に聞いたもの以上であつた。

六月末からしきりに氣味のわるい鳴動をつゞけてゐた淺間山。それが七月九日朝、俄然、天柱も碎けるばかりのおそろしい大音響とともに爆發したのである。山津浪がおこつて十餘丈の泥湯を捲き、横八里縱十八里にわたつて、砂石を降らしたといふのである。空の雲も赤黑く燒け爛れ、硫黄の焰氣は大地を這つて、三千からの村人を窒息せしめたといふのである。

「こんな時にやあ、話が輪に輪をかけて、大きく傳はるものだが、こいつあ、話よりもひでえや。」

風合羽の襟を搔きあはせながら、巳之吉はふたゝび周圍に眼をやつた。

脚もとの碓氷川は黃白色に濁つてゐた。見わたす田畑には、本來ならば稻、稗、粟、黍、綿、麻の實りがさはやかな初秋の風にかゞやき競ふはずなのだが、はげしい降灰のために、無殘にも枯死してゐた。

「高崎で厄介になつた藤兵衞親分は、いま信州へ入るこたあ見あはすがいゝといつておくんなすつたが、この騷ぎがかへつて俺のつけ目だ。――だが、なんしろ、こりやあ、思つたよりやひで

え有様だ。」

と、つぶやいた彼は、空腹と疲勞とが倍加するのを感じた。

高崎から板鼻、安中、原市、松井田と、次第に信州にちかづくにつれ、噴火の被害ははげしくなつてはゐた。が、とにかく碓氷を越えるまでは人家も滿足で、したがつて金さへ拂へば、梅干に握り飯ぐらゐにはありつくことができた。しかし信州にはいつてからは、まるでいけなかつた。一村全滅といふのも二つ三つ見かけた。生き殘つた被難民は、食ふに物なく宿るに家もない。少數の者は、千曲川傳ひに南佐久方面へ逃れたといふ。

「いや、他人ごとぢあねえ。俺だつて昨夜つからなにも食はねえ。食はねえと思ふと、こん畜生！　腹の蟲がグウ〳〵鳴き出しやがら！」

彼は苦笑した。しかし、この場合、進んでゆくよりほかに方法はないのだつた。

「――ふとしたことからわが土地をはなれ、脚絆甲がけ菅の笠、ながい松原たゞひとり、松の古木に腰をかけ、身のゆく末を思ふ時、笠にぱらりとさはりしは、雨かと思へば松の露――」

あるきだすなり、彼は、低く、鼻にかけるやうにうたつた。この唄はむかしから上州で流行してゐる、やくざの唄だつた。哀調のこもつた、いかにも多情多感な節なのだつた。

「へん、見つともねえぞ！」と、プツ、リうたひやめるなり、彼は自嘲的に高笑ひした。「へん、くだらねえ！　どうしておらあ、いつの間にこいつを聞きおぼえただらう？　雨かと思へば松の露、またもや袖にとさはりしは、露かと思へばわが涙――と來るんだ。なにが涙だ？　箆棒くせえ！　そんなメソ〳〵した心柄たあ、俺の旅あわけがちがふぞ。」

空ざまに胸を張つて、彼はいま〳〵しげに、プーイと唾を飛ばした。

「こら！　なにをする！」

道の一方に小高くかたまつてゐる枯草のなかから、大きな禿頭がニユッとあらはれた。

巳之吉は面喰つて立ちどまつた。

「え〻、びつくりさせやがる。」

「びつくりしたなあこつちだ。だしぬけに、頭越しに唾なんかはきやがつて！」

四角な、頑固らしい日焼けした顏――老爺ではあるが、ギロリと光るするどい瞳。

「そんなとこに人間がゐるたあ氣がつかなかつた。は〻〻〻。」

巳之吉は詫びるでもなく笑つた。

「は〻〻〻？　なにがは〻〻〻だ？」ムクと半身をもたげた老爺、巳之吉の、三尺の上帶に一本

刀を差した姿を、迂散くさげに睨めつけたが、「ふむ、お前はやくざだな。旅人だな。旅は初旅にござんす、お控えくださいか、はゝゝゝはあ！」

老爺は皮肉らしく、巳之吉の笑ひを笑ひかへした。

巳之吉は癪にさはつた。

「初旅ぢやあねえぞ。」

「ぢやあ、年がら年中の旅烏か、風來坊か。そんなこたあ自慢にあならねえ。

老爺は空うそぶいた。

「風來坊」といふ言葉が、よ〳〵癪にさはつた。

「爺い。たゝつ斬るぞ。」

おどしに刀へ手をやつて見せた。

「よしねえ。すぐそんなに憤怒れるなあ、お前があんまり強くねえ證據になる。」と、老爺はニヤ〳〵笑つた。「だが、お前、その構えから見ると、かなり手は利くやうだな。」

變な爺いだ——巳之吉は思つた。第一こんな災禍の跡に、村から遠いこの川岸に、ひとり傲然とふんぞりかへつてゐる。何者だらう？ ——巳之吉は刀から手をはなした。

「爺つあん。」と、彼は改めて呼び直した。「お前は誰だね？」

「俺にあ仁義あできねえよ。」

飽くまで皮肉な老爺である。それだけに巳之吉は、單なる好奇心でなく、その正體を知りたくなつた。で、笠の紐をほどきながら、威儀をつくろふやうに、彼はきいた。

「ほんとうに、爺つあん。お前は誰だね？」

「榮螺爺い——つて、あたりの奴等あ、かうおれをいつてゐるがね。はゝゝゝゝ。」

仇討兇狀

巳之吉は、老爺の顏を見なほした。

「榮螺……？」

「さうだよ。榮螺だよ。」と、老爺は形を示めすつもりか拳固をつくつて、空ざまに振つた。「こんなやつよ。殼はがんじようでな、中身はひんまがつてゐてな、いつたん蓋あしめたら、挺子でも動かねえやつよ。俺あその名が氣にいつた。本名よりやグツといゝ。だから文句あいはねえ。榮螺爺いでよろこんでらあ。ふゝゝ。」

「どこだい？　村は？」

「おれに住居があるもんか。おらあ榮螺だよ。榮螺はどこへ行くつたつて、自分の身體が自分の住居よ。」

「ふうむ。」と、巳之吉は、もう一度老爺の顏を見なほした。「だが、それにしても、こんなとこにひとり居殘つてるこたあねえぢやあねえか。自分の身體が自分の住居つていふんなら都合がいい。ほかの人のやうに家や田地の未練はねえはずた。どん〳〵思ふ方角へ逃げてゆきやあいゝぢやあねえか？」

「うんにや、おれにやあ、待ち人があるんだ。」

老爺は笑つた。

「待ち人？」

「さうよ。待ち人よ。淺間がドーンガラ〳〵と來て、この騷ぎがおこつた途端、おれあ淺間のてつぺんに噴きだした火柱で占易を立てたんだ。待ち人のな。」

「どうした待ち人なんだ」

「まさかこの爺いは、戀の待ち人つて柄ぢやあねえ。」と、老爺はちよつと眞面目になつて、「色

氣でなく、食つ氣の待ち人だ。おればかりぢやあねえ、誰も食物のねえのにくるしんでゐる。居殘つてる者あ、やつと蕎麥粉で生命をつねえでゐる有樣だ。だから、食物をもつてみんなを救ひにくる人を待つてるんだ。その待ち人だ。」

「なんだかあてのねえやうな話たが……。」

「そこが俺の占易だ。八卦だ。きつとくる。明日――おそくも明後日は來る。」と、老爺は自信ありげに頤をしやくつたが、「おい、兄い。お前も食はずらしいな。ひもじい顏をしてるぜ。」

「參つたよ。」と巳之吉は苦笑した。「信州がこんなにやられてるたあ思はなかつた。握り飯の一つや二つどこだつて手に入るもんと思つてゐた。」

「蕎麥粉があるが、御馳走にあづからせてやらうか。」

「お願げえだ。」

巳之吉は笠を脱つて頭をさげた。

「水あねえぞ。川の水にやあ山の毒氣が溶けてゐる。唾液でのむんだ。いゝか。お前、唾液つてもなあ、飛ばせるばかりが能ぢやねえんだぜ。」

老爺は腰にさげた大きな袋から、兩掌に一杯の蕎麥粉を、巳之吉の手拭へブチまけてくれた。

「有難てえ。」

巳之吉は噎せながら口に摘みこんだ。

さうして腹をこしらへてゐる間も、彼はこの老爺の正體を、なんだらうかと考へた。垢染んだ袷――しかし、いまゝでの言葉や動作から、どうしても唯者ではない。

いつたい何者だらう？

「はゝゝゝ。お前、執念深けえな。まだおれを妙な爺いだと疑つてるな？」

爺はちやんと巳之吉の心を見すかした。

「知りてえんだよ。爺つあん。」

巳之吉は胸にこぼれた蕎麥粉を指ではぢいた。

「榮螺爺いでいゝぢやあねえか。」

「うんにや、もつとお前を知りてえんだ。」

「知つて貰れえてえほどの爺いぢやあねえ。たゞ年をとつて、自然天然と、爺いになつたゞけの爺いよ。はゝゝゝ。」

「いや、爺つあん、爺あつんはきつとなんかだ。」

「その何かつてのが榮螺のえとよ。田鼠が變化ると鶉になる。鰻が變化ると山の芋になる。そこで人間が變化つて榮螺になつたゞけの話よ。」と、老爺は、なほ問はうとして顏を突きだす巳之吉を制しながら、「まあおれのこたあそれでおしめえだ。そこで、兄い、お前はどうした旅人なんだ？兇狀持かい？」

「いゝや。」と、巳之吉は無造作に笑つた。「これから持たうとするんだ。」

「誰かをつけ狙つてゐるつてえわけだな。」

「さうだ。」

「どうせ、くだらねえ意地つ張りからだらう。」

「兄の仇を討たうつてえのが、くだらねえ意地つ張りだらうか。」

巳之吉は急に怫然となつた。が、老爺は落ちついたもので、

「武士でもねえもんの敵討あ御法度だよ。」

「だから兇狀持になるんだといつてゐる。だが、この兇狀ならおれあちつとも恥たあ思はねえ！」

語氣の荒くなつた巳之吉を、ジツと強い瞳で見据ゑてゐた老爺は、なにか大きくうなづいたが、

「兄い。お前の狙つてゐる人間はこの信州にゐるんだな？」

「……」

巳之吉は滅多にこたえられないことだから默つた。

老爺はギロリと、一瞬瞳を光らせたが、

「信州にゐる人間なら、わかるんだがな。」

「わかる？……もし信州の人間だとしたら……誰だつていふんだ？」

「上田の文藏よ。」——さういつて老爺は、ハッとなつた巳之吉の顏色を見のがさなかつた。「そうれ、あたつたらう？　お前は文藏をねらつてゐる！　おれあな、もとあの一家にゐたもんなんだ。」

立ちあがるなり、ものをもいはず身構へた巳之吉。

「まあ、待ちな。」と、老爺はしづかに手をあげて制した。「さういやあ、お前がおれを油斷のならねえ爺いだと思ふなあ無理もねえ。だが、おれあ、あの一家に愛想がつきて、杯をたゝつけえして飛び出した男だ。古い話よ。十年以前の話よ。いまの文藏の親父の駒五郎の代の話よ。駒五郎つてやつあ、義理人情のねえ、腕つ節の強えほかにやあ取り柄のねえ男だつた。俺あそれが氣にいらなかつた。で、御免を蒙つた。——駒五郎はお前も知つてゐるにちげえなからうが、こ

の春死んだ。文藏がついだ。年齡こそ若けえが文藏はいゝ男だ。あんな親父の子にや勿體ねえほどできてる男だ。あの男あ親父の惡業を知つてゐる。駒五郎の蒔いた仇が自分の身に振りかゝつて來ることを覺悟してゐる。そればかりぢやねえ。いま文藏を取り卷えてゐる重太、岩吉、金兵衞、庄九郎つてえ子分は、みんな駒五郎讓りの、箸にも棒にもかゝらねえ野郎だ。文藏はかうしたやつをなんとか處置してえと思つてゐる。そして上田一家の評判をいゝものにしてえ、改めてえと考げえてゐる。だが駒五郎が死んで半年やそこいらぢやあ、どうにもならねえだ……」と、老爺はいつしか熱した調子になつたが、「兄い。お前の名もまだおれあ聞かねえが、お前の兄の仇つてえなあ、まさか文藏ぢやなからう。駒五郎だらう？」

巳之吉は、老爺の他意のない態度に安心して、また坐りこんだ。そしていつた。

「さうだ。駒五郎だ。だがやつあ死んだ。殘念ながら仇を討たねえうちに病死してしまつた。しかし、息子の文藏が上田一家をついだからにやあ、おれあ文藏を仇にしなきやあならねえ。——爺つあん、おれあ秩父の巳之吉てえ者だ。駒五郎はおれの親父の弟分だつた。それが親父の死んだ後、おれの一家を乘取らうしたんだ。幸ひおれの兄の松之助がしつかりしてゐたんで、駒五郎を追つ拂つた。駒五郎はこれを根にもつてゐた。上田であれほどの顏になつても、おれの一家を

潰してやらうと、いつも機會をねらつてゐた。そしておれの兄は卑怯なあいつの罠にかゝつて斬り殺されたんだ。二年前の七月だ。忘れもしねえいま時分だ。おれの一家はそれでバラ〳〵になつた。おれもとう〳〵旅に出なくちやならねえ身の上になつた。爺つあん。おれあ文藏に實の怨恨あねえんだ。だが、おれとして、このまゝ指をくはへて引込んぢやあゐられねえ。聞きやあ文藏は二十八ださうだ。おれよりあ二つ上だ。ちやうどいゝ相手だ。爺つあんの話のやうにそんな立派な男なら、なほさら出あつて見てえ相手だ。きつと立派に刀ああはせてくれるだらう。」

「巳之吉つあん。」と、親しげに老爺は呼びかけた。「おれやあお前の氣象がよくわかつた。うむ、文藏と出あつて見るがいゝ。面白からう。」

「爺つあんは、上田一家にゐたつていふんだが……？」

「うむ。そりやあいまもいふやうにむかしの話だ。おれあ上田一家たあ、あかの他人だ。今ぢやなんの關係もねえ人間だ。」老爺は一句々々にみづからうなづいて、「行きねえ。しつかりやんねえ。文藏はきつと立派に出あつてくれるよ。」

「さうと話を聞きやあ、おれあ道を急がう。」

巳之吉は輕く風合羽の埃をはらつて立ちあがつた。

「ゆくか。」と、老爺は腕組みして巳之吉を見あげた。「しつかりやんねえ。文藏は駒五郎のやうな卑怯者ぢやねえ。おれが文藏の子供時分、卑怯と臆病は一切ならねえと、よく仕込んで置いたんだから。」

「爺つあん。お前が育てた人間か？」

巳之吉の、この言葉の裏を、老爺はすぐ讀み取つた。

「おれあこゝで待ち人を待つてる人間だ。まさかおれがお前に先ぐりをして、文藏に用心しろと內通するわけあねえ。それぢや文藏に、卑怯と臆病はならねえと敎へた、甲斐がねえぢやあねえか。」

巳之吉は老爺を充分信用することができた。強くうなづいて、

「ぢやあ、お別れだ。」

と、彼は笠の紐を結んだ。

「あばよ。——これからおれあまたひと寢入りだ。待ち人——なんとかは、寢て待てつていふからな。」

すつかり呑氣に笑ひながら、ゴロリと老爺は横になつた。

裏切り相談

巳之吉は老爺との不思議な遭遇を、いろ〳〵思ひめぐらした。

「えれえ爺つあんだ。あゝした爺つあんに育てられた文藏なら、きつと立派な男にきまつてる。うむ。惡びれねえ立合をしてくれるだらう。生命を賭けてやる勝負に、さうした相手なら樂しみだ！」

彼は全身に勇ましい血の湧きあがつてくるのを感じた。——

——彼が小諸の城下に着いたのは燈ともし頃だつた。こゝはそれほど災害を被つてはゐなかつた。しかし家々は恐怖と不安に脅えてゐた。こんな時には必らず起るはずの、惑はしたつぷりな流言が盛んだつた。——もう一度、もつと猛惡な爆發があるとか、飢饉と疫病がすでにはびこりつゝあるとか、それがため方々に兇盜が横行し、百姓一揆がはじまつてゐるとか——

こんな落つかないなかだから、巳之吉は宿を求めることができなかつた。旅籠屋は二三軒あるのだけれど、稼業どころではないらしく、宵の口から戸をおろしてゐた。

「頼みだ。湯にへえりてえの、一本燗けてほしいのつていふんぢやねえ。こんな場合だ。ひと晩

寢せてくれて、茶漬で追つ拂つてもらやいゝんだ。迷惑あかけねえよ。」

とある一軒へ無理やり飛びこんで、巳之吉は、亭主に談じ立てた。

「それつくらゐのことなら、できんわけでもねえですがね。なんでもこの四五日あ街道筋がめつきり物騒になつたつていふんでね。このどさくさを幸ひに、追ひ剝ぎや押込强盜がのさばるつてこつてす。で、お觸令が出て、お城下にちよつとでも怪しい者を見かけたら、訴へろつて……」

亭主は巳之吉の風體を檢分でもするやうな眼をした。

「冗談ぢやあねえぜ。なるほどおれあ旅人だ。だが、兇狀持やいかさま師ぢやあねえ。たとへばお役人衆の見まはりがあつても、おれあちやんといひ開きをする。心配無用だ。泊り錢は倍出すよ。疑ふなら先き拂れえだ。」

巳之吉は言つた。この最後の一句に利き目があつた。亭主の澁い顏はほぐれた。巳之吉は中庭越しの奥の八疊に案内された。疊は油染んでをり障子はやぶれ壁は剝げちよろけてゐたが、この宿では最上等の部屋らしかつた。

待遇はどうでもよかつた。彼はこゝで充分氣力を養ひ計畫を練つて、目ざす上田へ乘りこむつもりだつた。上り口の土間では一晩厄介になるといつたが、都合によれば二晩三晩をすごしたつ

て大丈夫だといふことを、彼は亭主の顏色で見ぬいてゐた。

こゝから上田までは五里を缺けるほどの道程である。造作はない。大事な問題は文藏とどうしてであふか、その手段である。——甲州から信州へ出る木曾街道の方は、巳之吉には經驗があつた。が、上州から信州、千曲川づたひに越後へ出る街道筋は初旅なのであつた。だから上田はまつたく勝手を知らない土地なのである。そこへこつちは單身、先方はしたゝか者の子分を擁する文藏をねらふのである。盲滅法に、我武者羅に斬りこむのは、見たところ勇ましいが、結局は馬鹿な生命を賭ることなのだ。

火柱仁義

腕つ節ばかりはたのめない。計畫が必要だ。手段を講じて文藏と一騎打の勝負がしたい。文藏といふ男は、あの榮螺爺いの言葉で推測すれば立派な男だ。さうした男なら、方法さへ誤らなければ、惡びれず立派に出會つてくれるだらう。

——巳之吉は膳を待つ間、柱にもたれてジッと考へはじめた。

「……だからよ、これをいゝ機會に、文藏を……」

ハッと、巳之吉は耳を澄ました、折も折、彼は「文藏」といふ聲を聞いたのである。文藏といふ名も多い。人違ひだらうとは思ふ。だが、文藏と聞いては聞き逃せぬ。

彼はソッと這ひよつて、聲の漏れてくる壁へ、ピタリと身を押しつけた。

「……さうだ。これがいゝ機會だ……やつゝけなくちや……」

「……このまゝにして置きやあ、いつかは文藏の方から俺達を追ひだすにきまつてゐる……」

「……やつゝけて、こつちの天下にするんだ……先手を打つんだ……」

きはめて低い聲であるが、とぎれ〳〵ながらも、かう判斷していゝ言葉が、巳之吉の耳にはいつた。そして、更に聲は幽かになつた。やつと「布引觀音」といふ言葉と、「三百兩」といふ言葉が聞き取れた。

「——?」

巳之吉に壁からはなれて、壁を見つめた。

彼は話の內容ばかりでなく、聲の內容まで聞きわけたのだつた。四つのちがつた聲である。すなはち四人の男がゐるのである。そしてその語調や語勢から、四人の男はいづれも三十五六歳の、屈强な男だと判斷される——

火柱仁義

趾音をしのばせて、彼は部屋を出た。店の方へ行つた。

帳場のわきで、亭主は煙草をのんでゐた。

「俺の隣室にも客があるんだね？」

と、こんどの災害についていろんな話をしたあと、巳之吉はなに氣ない樣にかうきいた。

「へい。お馴染みのお客でしてな。あなたがおいでの時あ表二階にゐなすつたが、相談があるからつてえんで、奥の座敷にお變りなすつたんですよ。」

亭主は應へた。

「お馴染……？　お百姓さんでもねえやうだな。」

「え〻、上田の文藏親分一家の人達ですよ。」

――やつぱりさうだつた！　巳之吉は緊張した。が、うはべは飽くまで空つとぼけて、

「上田の文藏親分？　聞いたことのある名だ。」

と、首を捻つた。すると亭主は巳之吉の姿を見直すやうに見やつて、

「上田の文藏親分といやあ、年齡こそ若けえが、信州ぢやあ知られた親分さんですぜ。死んだ親父さんの駒五郎親分は評判がよくなかつた。その惡い評判を、後繼者になつて半年たゝねえうちに、すつかりとりもどしたんです。いろんな義俠な仕事をやつて、ね。こんどなんぞも、上田には幸ひなんの災難もなかつたが、この小諸からさき、北大井、南大井、御代田、追分、沓掛と、

ひどい有樣になつてゐるのを聞きつけて、自分一手に救ひ米を出してえつていふんで、家の大事な刀や道具を賣りはらひなすつたさうです。あんたの隣室のお客は、重太さん、岩吉さん、庄九郎さん、金兵衞さんといつて、文藏親分の四天王つていはれる子分さんだが、それが昨日つから、一足さきにこの城下まで來られたんです。文藏親分は上田で金をこしらへるなり、明日の朝こつちへ來られるんです。」

と、話してくれた。

巳之吉は感心したやうにうなづいた。こゝまで聞けば充分である。あとはほかへ話をまぎらし、い〻加減なところできりあげて部屋へもどつた。

もどつてからも、ひそかに隣室の氣はひをうかがつた。が、もう聲は聞えなかつた。

「む！　さうだ！」

或る計畫が巳之吉の胸の中できまつた。彼はひとりしづかに微笑した。

立合ひ承知

小諸の城下をはなれて千曲川の下流。その南岸に續く斷崖は布引山と呼ばれてゐる。むかしこ

丶に無信心な慾深か婆さんが住んでゐたが、或日白布を牛の角にかけて干さうとしたところ、突然牛が走り出し、婆さんは驚いて追ひかけると、牛はそのま丶ひた走りに善光寺まで走り續けたため、婆さんは喘ぎ〳〵善光寺へゆき、はじめて佛徳の難有さを敎へられて信仰の道へはいつたといふ。俚諺にある「牛にひかれて善光寺詣り」はこの傳說から起つたのである。

その布引山の麓にある布引觀音。

巳之吉が隣室の話を漏れ聞きした翌日の正午過ぎのこと。ひとりの子分をしたがつて、足がためも充分なキリ丶とした旅扮装、三十歲ばかりの眉の濃い小肥りな男が、赤銅づくりの一刀を無造作に腰にブツ込んで、街道をトツトと足を早めてきた。

この男が、巳之吉のねらふ、上田の文藏なのだつた。

と——觀音堂前の大きな松の木立から、立ち塞がるやうにあらはれた四人の男。

文藏は一瞬怪しむ眼をしたが、

「おう、四人揃つて迎けえに出てくれたのか。それにや及ばなかつたのに。」

彼は前にならんだ子分の岩吉、重太、金兵衞、庄九郎へ順々に、愛想のい丶微笑をむけた。

「金はできましたかね？　こつちの、米を買ひ入れる手筈あうまく行つてるんですが。」

四人のうちの年齡かさな、鷲鼻の岩吉がきいた。

「む丶、三百兩。やつと今朝まとまつた。」

文藏は滿足さうに、ポンと懷中をた丶いて見せた。

「さうですかい。できましたかい。そりやあなによりだ。」と、岩吉は、他の三人へ素早い眼くばせをしたが、たちまち粗暴な薄笑ひとともに、ガラリとかはつた凄味な調子で、「賢い〳〵といはれてゐるが、文藏、お前はあんまり賢くもねえな。」

「なに。」

自分を呼び棄てにするばかりか、明らかに敵意をあらはして相手の態度に、文藏はキツとなつた。

岩吉は傲然と肩をそびやかした。

「さうだ。賢くねえ。——おれ達四人が、その三百兩をもらふにきめてることなんか知らねえで、さうやつて金の工面をしたんだからね。」

すると、その脇に立つた猪首の重太もせ丶ら笑つた。

「金ばかりぢやあねえ。ついでにおれ達あ、お前の生命ももらふにきめてるんだよ。」

「な、なにつ？」

文藏は一歩さがつた。

「上田一家は、おれ達四人でやつてゆく。あとは心配はしねえがいゝ。」

「お前が俺達四人を追つ拂ふつもりでゐるこたあ、ちやんと見ぬいてゐるんだ。お前が立つかおれ達が立つか、いつかはかうして血を見なきやあならねえんだ。」

庄九郎と金兵衞もこも〳〵嘲るやうに笑つた。

文藏は、自分がしたがへてきた子分へ振りかへつた。

「おい、勘次、手前はどつち方だ？」

「え……」

その子分は立ちすくんだやうに、眼ばかりパチ〳〵させた。

「はゝゝゝゝ。どつちでもいゝ、勝ちさうな方へつくか？」と、文藏は悠然と四人へむきなほつて、「おい。見ろ。おれあ賢くねえが、この勘次あ、お前達よりあ賢いやうだぜ。」

「勘次、おれ達の手助けをしろ。どうせ文藏は刀の錆だ。」

岩吉がいつた。

「それもよからう。おれあおれひとりの方が手まとひがなくつていゝ。」

文藏は強く笑つた。

「やつちまへ！」

もう重太はぬいた。迫つた。

「文藏、觀念しろ！」

岩吉もぬいた。庄九郎、金兵衞もぬいた。

「はゝゝ。おれあいゝ子分をもつたよ。眞劍の稽古臺になつてくれる子分をな。」

文藏は沈着に笑つた。

「子分たあ言はせねえぞ！」

重太は氣短かにサツと正面から斬りこんだ。チヤリンと文藏はぬきざまに刀を合はせた。

「逃げ隱れあしねえ。ゆつくりこい。」

文藏は笑つた。

「野郎つ！」

岩吉は右から突つかけた。

「おつとあぶない。」

文藏は左にひらいた。

庄九郎と金兵衞はうしろにまはらうとした。文藏はそれをふせぐため、松の木にピタリと脊をよせた。

勘次はぬいていゝのか惡いのかわからぬやうに、戸惑ひして、五人の爭鬪をボンヤリ眺めてゐた。

「えいつ！」

隙を見つけた文藏の刀は大きく閃いた。

「あつ！」

金兵衞が左の肩口をやられて、よろ〳〵と尻餅ついた。

「野郎つ！」

庄九郎が飛びこんだ。

と、同時に文藏の刀は迎ひ突きに胸元へ。

「わつ！」

庄九郎はのめつた。

「早く！　岩吉！」

重太は叫んだ。

「合點だ！」

岩吉は應じて、重太と左右から一氣に文藏へかゝらうとした。

街道をまつしぐらに、砂を蹴立てながら走つてくる者――巳之吉であつた。

「文藏さんてなあ、お前さんか！　働かせてもれえやすぜ！」

すぐ彼は刀をぬいた。岩吉を襲つた。松の木を楯に、ひと息いれてゐた文藏は、この見知らぬ助勢者に驚いた。いや、それよりも岩吉と重太が驚いた。

「なんだ。つまらねえ腕立てして怪我あするな！」

岩吉はたじろぎながらも、威嚇した。

「醉狂の腕立てぢやあねえ。おれにやあおれの考げえがあるんだ！」

巳之吉は遮二無二、斬りかけた。

「重太、文藏をやれ！　おれあこの若造をかたづける！」

岩吉は巳之吉の刀を引つはづしながら叫んだ。

二組の闘ひがはじまつた。喚きと罵りが入りまじつた。

「うつ！　く、く、くつ！」

「おつ！　だあ！」

岩吉と重太が、巳之吉と文藏の足もとに、朱にそんで斃れたのは、ほとんど同時であつた。勘次はいつの間にか、逃げだしてゐた。

「ふつ！　骨を折らせやがつた。」

巳之吉は刀の血を振つた。

「聲をかける暇もなかつた。加勢くだすつて難有うどぜえやす。お前さんはどなたです？」

文藏は頭をさげた。

「仁義あ不勝手でごぜえやす。」と、巳之吉はたゞしく文藏とむきあつて一禮した。「早速のお願えです。あつしやお前さんに、是非立ちあつていたゞきてえんです。」

「えつ？　あつしと？」

文藏は腑に落ちぬ顏をした。

「あつしやあ秩父の巳之吉です。松之助の弟の巳之吉です。かう申しやあ、それでわかつてくださるでせう。」と、巳之吉は、四人の死骸へちよつと眼をくれて、「こいつ等の手でお前さんを殺させちやあ、あつしの目的がなくなるんです。それで加勢したんです。」

「――さうですか。――お前さんが松之助さんの弟さんか。」と。文藏は輕く巳之吉の言葉をうけて、「む、わかりやした。お前さんにやあはじめてお目にかゝりやすが、お名前は聞いてゐやした。きつと、いつか、あつしにあひにきてくださると思つてゐた。」

「刀あ合はせていたゞきやせう。」

「承知です。」

兩人は理窟も辯解もなしに、互ひに叮嚀な目禮をかはして左右に分れた。

この待ち人

「やつ！」

「よう！」

あらためて二人の切先は寄つた。

「あゝ、いよ〳〵やるな。見物しよう。」

その時、突然、横あひから心地よげな高笑ひがした。巳之吉も文藏も、ちよつと氣合ひをぬかれて、飛びはなれざまに振りむいた。

「や、爺つあん！」

巳之吉はおどろいた。——あの榮螺爺いが、兩足をふんばつて、觀音堂の前に突つ立つてゐたのだつた。文藏も老爺の出現に、巳之吉とはべつのおどろきをおどろいたらしかつた。

「なんでもいゝ。ふたりとも思ひきつてやつてくれ。」と、榮螺爺いは首を振つた。「おれあどつちも贔負だ。巳之吉も文藏も好きだ。おれあどつちにも加勢してえ。」

場合が場合、巳之吉と文藏とはこの不意の闖入者に考へをむける暇はない。すぐたがひに構へなほした。

「やつ！」

「よう！」

ふたゝびジリ、と切つ先が觸れあつた。

「ふむ。いゝ立合だ！」と、榮螺爺いはうなつた。「ふたりともしつかりしてゐる！　おつ、と

つ、とつ。巳之吉！　右脇が空いてるぞ。おつ、とつ、とつ。文藏！　その切つ返えしやあ肩を使つてうつんだ。」

兩人がパツと斬りはづして飛びちがつた時、老爺はかういつた。

「やつ！」

「よう！」

巳之吉と文藏の額には汗がにぢんだ。四つの眼は血走つた。

「若けえだけに元氣なもんだ。いゝ氣組みだ。さあ、寄つてけ！　刀あ一尺短けえつもりになつてつかふんだ。で、なきや、相手を斬れるもんぢやあねえ！」

榮螺爺いはふたりを勵ました。

巳之吉と文藏は、またジリ、と進んだ。と、はげしい敵意が燃えあがつたか、二つの刀はサツ、サツとつづけざまに閃めいた。たがひに一氣の勝負を望んだか、こんどは飛びかはさなかつた。血を見るまで打ち打たうとして、業を捨て、身を捨て、たゞ嵩にかゝつて斬りこんだ。

「おつ、とつ、とつ！　そ、そんな無茶あねえぞ。それぢやあ、ふたりつとも無駄に怪我あするばかりだ。」

火柱仁義

眼も眩むばかりの喘ぎのなかに、巳之吉と文藏が一歩も退かず、まぶれ爭ふ時、榮螺爺いはいましめた。

「やつ！」

「よう！」

三度びはなれて、巳之吉と文藏は、セイ〳〵刀を構へなほした。

「まだやるのか！　馬鹿野郎！」

榮螺爺いは叫んだ。この聲は、いままでとはちがつた、嚴かな響きをもつてゐた。命令するやうな覺醒するやうな響きをもつてゐた。

「巳之吉もわかつていゝはずだ。また文藏も知つていゝはずだ！」榮螺爺いは叱咤した。「おれあ仲裁しようつていふんぢやねえが、おたげえに考げえて見たらどうだ。ふたりはこゝまでやりやあ充分ぢやねえか。これからさきの立合は、たゞ斬る、殺すといふだけだ。そりやあ人間の醜い邪念てえもんだ。」

と――文藏は刀の手を下げた。

「巳之吉つあん。あつしやあ先に刀を引きましたよ。刀を引くなあ男の恥です。だが、恥でいゝ。あつしやあお前さんにやあ恥を掻いていゝ。」と、彼は巳之吉の構への前に、スツクと身を晒した。「あつしも立合はこれまでだと思ふ。これからさきあ、ただ無闇な斬り合えだ。そりやあ立合でなくて唖み合えです。あつしやあお前さんたあ唖み合えはしたかあねえ。」

火柱仁義

巳之吉の刀の手もさがつた。――彼は強く頭を振つてこたえた。

「文藏さん。わかりやした。よく立合つてくだすつた。もうあつしにやあいひ分はねえ。刀あ一緒に引いたんです。お前さんがさきぢやあねえ。あつしがボンヤリだつたんです。」

榮螺爺いが走り寄つた。

「立派だ！　ふたりともいゝ男だ！」

彼は上機嫌に笑つた。

「爺つあん、どうしてこゝへ來たんだ？」

文藏は、はじめて老爺に挨拶した。

「お前が待ちきれなくなつてよ。それにこの立合もちよつと心配だつたからな。」

老爺はこたえた。

「なに、おれが待ちきれなくつて……？」

「お前が救ひ米をするのをよ。」

文藏は腑に落ちぬ顏をした。

「え？　どうしてそれを？」

「おれの育てた子だ。おれの敎えた子だ。お前がこの際その仕事をしなくつてどうする？　また、おれにそれがわからなくつてどうする？」と、老爺は例の光る瞳まで笑はせながら、「おれあ、ちやんと知つてゐた。面と向つていふなあいけねえが、お前の親父あ惡業をかさねた。その罪ほろぼしあお前の役だ。きつとお前が救ひ米の算段をすると思つてゐた。上田一家の評判をとりもどすなあこの時だからな。――おれあ、淺間が、ドーンと火柱あ噴きあげた途端に、この考げえをもつた。で、毎日々々、街道筋に寢ころんでお前を待ち構えてゐたんだ。」

この言葉に、巳之吉は思はず口を出した。

「それぢやあ爺つあんが待ち人のなんのといつたなあ、文藏さんだつたのか？」

老爺は「ふゝゝ。」と、滿足げにうなづいた。

「――さうか！　さうした文藏さんの仕事あ知らねえで、おらあ私ごとの立合を望んだ。なんてえおらあ馬鹿野郎だ！　さつき爺つあんがどなつた馬鹿野郎つて言葉あ、おれひとりがもらつて

置く！」

巳之吉は文藏へ頭をさげた。文藏はたゞ微笑して、その詫びを遮つた。

「おれあ、なにからなにまで見物したよ。」と、老爺はいつた。「ふたりで、重太、岩吉、金兵衞、庄九郎を斬つた手際あ見事だつたぜ。さあ、これで上田一家あ立派なものになる。文藏、おらあ十年振りで、お前の家へ歸るとしよう。」

「難有てえ！　爺つあんがまた客分として來てくれりやあ、上田一家は萬歲だ。」

文藏はよろこんだ。

「あつしも、上田一家の者にして頂きてえ。承知して貰れえるかな？」

巳之吉は感に耐へていつた。

「そいつあ、いよ〳〵難有てえ！」

文藏は、巳之吉の手を取つた。

――間もなく姿を整へなほした三人は、信州を救ふ大仕事のために、小諸の方へ、笑ひ聲も賑やかに引き返へしつゝあつた。

冷飯劍法

辻斬といふものが流行しはじめたのは、寛永六年の春頃からである。

元和元年豐臣氏が亡び、世は確實に德川氏のものとなつて、まだ十四五年にしかならない。文化主義の曙光はあらはれつゝあつたが、まだ〳〵戰國武士の殺伐な風は遺つてゐた。そして江戸でこれを代表したものは、旗本武士である。だから辻斬も大部分彼等の手によつて行はれたと見ていゝ。はなはだしきに至つては、當時の將軍家光までが、忍びで辻斬にでかけ、大久保彦左衞門に取つて押へられたといふ浮說まである。これはその六月、江戸城郭內の北丸の門前で辻斬があつたのを、おもしろく誰かゞ脚色したものだらう。「江城年錄」や「東武實錄」には辻斬に關する取締法が示されてゐる。辻番所ができたのもこのためであつた。

しかしうちつゞく泰平は次第に彼等を安逸惰弱に陷らしめ、伊達風俗の發生となり、遂には點茶挿花歌舞音曲に浮身をやつし、「賤の小田卷」にしるすところの、「歴々の子、惣領より次男三男、三味線引かざるはなし」といふやうな有様となつた。したがつて彼等の家庭生活は、道德的にも經濟的にも亂脉であつた。

が、この間にも無論異例はあつた。本篇は文政の末年にあつたといふ、辻斬によつて凶盜を改心せしめた旗本の若侍の挿話を、ヒントとして作爲したものである。

闖入者

——ムクと東吾は蒲團を跳ねた。

「起きなせえ。眼をさましなせえよ。お前さんは生命をねらはれてゐるんだ！」

庭に面した雨戸。そとから口を押しつけるやうに、ひくい聲がいふのである。

「何者だ？」

一喝しかける東吾を、聲はシツと強く制した。

「疑つちやあいけねえ。はやく起きなせえ。お前さんは生命をねらはれてゐる！　お前さんは東吾さんてお方でせうね？　東吾さんならあぶねえ！　はやく！　いゝかね？　はやく！」

せき込んでこれだけ警告すると、聲の主は風のごとく走り去つた。

「——？」

怪しみながらも、東吾は。いはるゝまゝに坐りなほした。いつしか枕許の一刀をひきつけてゐた。燈火を消した八疊の離座敷。彼はその暗がりのなかへ、キツと油斷なく瞳を据ゑた。

雨戸のそとの聲の正體は、もとよりわからなかつた。つひぞ聞きおぼえのない音聲、しかも武家でつかはれる言葉ではない。仲間小者でもあゝしたものいひ振はしないのである。だが、正體が誰であるにしても、この深夜、この警告はたゞごとでない。

東吾は八方へ氣をくばつた。

——と、彼の耳に、こんどは廊下の彼方から幽かに忍び寄る、或る跫足が感じられた。

「……」

東吾は蒲團をはなれるなり、出入口になつてゐる襖に近く、ピタリと壁へ身を寄せた。一人、二人、三人——と、彼がしづかに跫足を數へわけた時、それはピタリと止んだ。重くるしい沈默

が、やゝしばらくつゞいた。

「わしの生命をねらふ……？」

東吾はグツと唾液を呑みこんだ。刀の櫛にかゝつた右手の臂を輕くもちあげて、肩の調子を試した。しかし、まだ彼は、「ねらはれてゐる」といふ氣はしなかつた。

「やつ！」

ス、ス、ス――軋まないやうに、襖が押し開かれる。

飛びこみざま、芋刺しになれとばかり、東吾の蒲團へ突つこむ刀！

理由は知らない。が、一切がかう計畫的である以上、たしかに「敵」と見なしていゝ人間である。しかも寢込みをおそふ卑怯な「敵」である。東吾は滿身に、サツと憤怒反擊の血が沸いた。右足を踏みだすなり、腰をきかせて、拔くと撥ねるの一拍子の業。

「わつ！」

ドタリと倒れる。

「敵」はこの不意の逆襲におどろいた。たじろいた。が、さらに刀をならべてジリ、と迫つてくる。暗黑に瞳をさだめて、東吾は體を固めつゝ發せず、「敵」の打つ緣によつて動かうといふ、

强目な構へ。

「えいつ！」

聲でおびやかし、嵩にかゝつて振りこむ「敵」。その一瞬を左にはづした片手突き。東吾の刀は充分伸びた。

「うつ！」

第二の「敵」が反りかへる――と、同時に、第三の「敵」を眞横に拂つた變り身のはやい小業。手は冴えて胴にはいつた。

「むゝゝつ！」

折り重つて倒れる――

「ふむ……」

東吾はしづかに行燈をともした。

頤をしたゝか割りつけられた男、胸板ふかく突きあげられた男、脇腹へザクツと極めつけられた男――いづれも覆面、襷十字に、股立ちたかくとつてゐた。

「大したお支度だつた。御苦勞千萬だ。」

東吾は笑つた。そして覆面をひつ剝いだ。

「お、これは！」

驚いた。三人とも見知つた顔である。近藤、池内、杉村といふ、義弟半次郎の友人である。毎日のやうにこの邸へ遊びにきてゐた。そして繼母は、いつも愛想よく彼等をもてなしてゐた。

「……」

東吾はつゝ立つたまゝ、足もとに斷末魔の呻きを呻いてゐる三つの姿を、ジツとふたゝび見おろした。

悲痛な歎息が彼の唇からもれた。誰がこの三人を使嗾したか、彼にはよくわかつたのである。

キツと決意したやうに、彼は大きくうなづいた。刀をぬぐひ、手ばやく衣服をあらためた。落ついた歩調で、彼は廊下づたいに書院へ出た。そこを通りぬけて中庭沿ひの縁をまはると、お谷と半次郎が寢所にあてゝゐる表座敷である。お谷――東吾の亡き父の妾で、半次郎はその子――東吾からいつて義理の弟なのである。

焙火が、なにかを待ちまうけるやうに、搔きたてられてゐた。

彼が障子の前にたつと、すぐひそかなお谷の言葉があつた。

「おやりなされたか？」

東吾はこたへなかつた。

「とほい離座敷、もの音は聞えませなんだが、わたしと半次郎は、みなさまにお怪我のないやう祈つてをりました。相手は手刹きとはいへ寢込みのこと、格別お骨の折れるわけではありませんでしたでせう。――あとの始末はわたし達の役。さ、はやく、裏木戸からおたち退きなさい。」

「わしは當家の長男。たち退くにしても裏木戸からする要はない。玄關からにさせて貰はう。」

昂然と、東吾はいつた。

意外な聲を聞いて、お谷は仰天したらしかつた。狼狽と恐怖と――部屋の一方から逃げ出しさうな氣はひがした。

「しづかになさるがよい。わしはこの障子をあけはせぬ。お谷殿――そなたの顏も、半次郎の顏も見たうはない。騷ぐとかへつてためになりますまい。」と、東吾は吐きだすやうにいつた。「――父上の御病死――その日から、わしはこの家を去らなければならぬと考へてゐた。しかし大切なのは去るべき時期。辰野の家名を傷けぬやう、また私が半次郎へ家督を讓るにも、相當の理由をつくらなければなりますまい。それ等のこと、よく〳〵そなたと談合いたさうと思うてをつた

に、今夜の仕打は！」

障子のなかは、息を呑んでひとことのこたへもなかつた。

東吾は苦笑し、憫笑した。――もうなにもいふ必要を感じなかつた。あさましいお谷の心、卑屈な半次郎の心、それを彼等自身に知らしむれば充分である。

刀を提げたまゝ、東吾は、縁の一端の杉戸をあけ、中座敷から玄關の方へあるいた。

「若殿様……」

襖の蔭から膝行り出て、彼の袖をひきとめた者があつた。振り返へると、それは用人の辻嘉兵衛であつた。

「おゝ、嘉兵衛か。そちは？」

「はい、一切を……」

嘉兵衛は、心痛に耐へぬ顔をあげた。

「左様か。存じてゐるか。」と東吾はうなづいたが、「やむを得ぬ仕儀だ。わしはこのまゝ家をたち退かうと思ふ。そちは父在世中より忠勤いたしてくれた者、今夜のこと、彼等は盗賊も同然、死骸の處置はどうにもつかうし、またお谷としても身に負ふべき責任、よい智慧をめぐらさるべ

きだが、この上とも辰野の家名にかゝはらぬやう、よくたのんだぞ。」

「仰せられずとも、嘉兵衛、身に代へましても……」

「なによりの言葉だ。うれしいぞ。」

ゆきかゝる東吾の袖を、嘉兵衛はまたつかんだ。

「若殿様……いづれへ……？」

東吾はしづかに微笑した。

「一切をそちにまかせた上は心殘りはない。これからは足のむき放題だ。親戚や友人の厄介はかけぬ。それは家の恥をさらすことになる。まづ安旅籠の泊り〳〵だ。武士たる性根は生涯失はぬつもりだが、身過ぎ世過ぎの商賣は、幸ひこの巖疊なからだだ。なんでもやれる。」

「それにいたしましても……」

と、嘉兵衛がソッと差出したのは、ひと包みの金子であつた。東吾は無言でそれをうけ取つた。

「なにかと御不自由がございましたら、いつなりと……」

と、嘉兵衛が見あげるのを、東吾は「いや。」と制した。彼はズッと式臺へ降りた。

間もなく夜があけるか、厩のはうで勇ましい馬の嘶きがした。

乳兄妹

おでゝこ芝居、輕業、講釋、女義太夫、居合拔き、矢場、獨樂廻し、ならび茶屋――西兩國の賑はひ。

「あつ、い、痛てえ、痛てえ。旦那、お見のがしを。ど、どうぞ御勘辨を。」

唐棧づくめの小意氣な男。グイとねぢあげられた右手を、左手でさゝへるやうに、顏をしかめて聲を落しながら幾度も頭をさげる。

「ひとに突きあたつて懷中に手をいれる……なにが勘辨だ？」

やゝのびた月代、凛と張つた眉、それで顏色の白いのが蒼味を帶びて見える若い武士――辰野東吾であつた。

「だ、旦那。どうぞお見のがしを。」

あたりの雜沓に氣を兼ねながら、ひたあやまりにあやまる。

「武士たる者の懷中をねらふなどゝ……この手を、橋の欄干へ小柄で縫ひつけてやらう。」

東吾は男をひつ立てようとした。

「あつ、いつ、痛てえ。だ、旦那、どうぞ御勘辨を。お見のがしを。」

「わしが見のがしてやつたら、ほかの人間に手を出すだらう。この手がいかんのだ。この手を働きのできぬやうにしてやらねば。」

――その時であつた。剃刀をあてたばかりの眉の青い、細面で色の淺黑い、すつきりしたひとりの內儀風の女が、どこからか、小刻みに日和下駄の音をたてゝ、スイと東吾へ寄つてきた。

「……おや、若樣ではございませぬか。まあ、どうなされたのでございます？」

東吾は顏を振りむけた。

「む……おのぶか。」

「どうも若樣のやうだと存じましたが、やつぱり若樣でございました。」――內儀風の女は、とらへられた男へ、一瞬、東吾も氣づかぬほどの眼くばせをくれたが、「若樣、なにごとなのでございます？」

「む。こいつ奴、わしの懷中をねらつたのだ。掏摸だ。いま、成敗してやらうとするところだ。」

東吾は笑つた。

「いけません。およし遊ばせ。」と、內儀風の女はいましめるやうな耳語で、「若樣、かうした

男達には、仲間がたくさんございます。くだらぬ仇をいたすものでございます。それは若様は戸倉の道場で、小天狗といはれておいでのお方。なにをお恐れなさりもいたしますまいが、相手がいつまでも若様はお悪戯のお氣持がございます。」

相手ではお名前にかゝはります。さあ、乳母の申すことをおきゝ遊ばせ。ゆるしておやり遊ばせ。

「む……」東吾は、さういはれて、いかにもやんちやらしくうなづいた。で、男へ、「こら、ほかならぬ乳母やの言葉だ。ゆるしてやるぞ。以後はこれに懲りろ。」

「へい、有難うぞぜえやす。」

突つぱなされてよろめきながら、男は頭をさげたかと思ふと、パツと身を翻へして、すばやく人ごみへ紛れこんでしまつた。

「はゝゝゝゝ。」

東吾は笑つた。その姿をつくゞゝ見なほした彼女は、いぶかし氣に、

「若様とかやうな場所でお目にかゝりますとは……。若様なぞ、かやうな場所に御見物なさいますやうなものは、どざいますまいに……」

「いや、澤山あるぞ。今日はあのむかうの掛小屋で剣の双渡りを見た。それから抜け首の娘を見

た。面白かつたぞ。」と、東吾は更に笑つて、「あの野天の居合抜きはまづいな。あれはごまかしだ。あんな業で見物が感心するとはおかしい。わしがやるなら、ずつと手際のいところを見せてくれるんだが。」

「まあ。なんといふことを仰有います。辰野の若様ともあらうお方が。」

彼女は咎める眼をした。

「おのぶ。わしはもう辰野の若様ではないのだ。両國で居合抜きをしたところで、誰も異存をいふはずはない身分なのだ。はゝゝ。」

「え、なんと仰有います？　若様。」

「わしはあの家をたち退いたのだ。いや、逃げ出したといふ方がいゝかな。それとも追ひはらはれたといふ方がいゝかな。はゝゝゝゝ。」

「まあ、それは一體……？」

と、おのぶと呼ばれた内儀風の女が、おどろき怪しんで、東吾の顔を見あげた時、

「おつかさん、わたしをいつまでひとりにして置いて。」

かるくすねるやうに、うしろから聲をかけた娘——

「おや、お玉。お前を待たせてゐることを、すつかり忘れてしまつてゐたよ。ほんとうにお珍らしい、ほんとうにお懐しいお方に、思ひがけなくおあひしたものだからね。」と、おのぶはニコニコしながら、「お玉、御挨拶申しあげな。いつもお前に話してゐるお屋敷の若様だよ。——若様、これは私の娘でございます。お玉と申しまして。」

「左様か。」

東吾は見た。——千筋の山繭縮緬の着附、白天鵞絨へ銀糸で、三津五郎縞を縫はせた半襟のよく似つく意氣好みのなかに、うぶらしい二重瞼と、ふくよかなくゝり頤とが、まづうつくしい印象を與へる娘だつた。

「……」

ちよつと羞恥んで頭をさげる。艶やかな島田髷の鼈甲の笄がキラリと光つた。

「まあ、それが御挨拶かえ？　若様、おゆるしくださいまし。十九だと申しますのに、まるでねんねえでございます。ほゝゝゝ。」と。おのぶは愛嬌よく叱つたが、また急に心配さうに話をもどして、「若様、お屋敷をおたち退きなどと、それは一體、どうなされたのでございます。」

「わしは、お前もさつき申したとほり相かはらずの悪戯小僧でな。家のなかでどうも評判がよく

ない。それでゐたゝまれないで飛び出したのだ。」

肩をゆすつて、東吾は大まかに笑つた。

「いゝえ、いゝえ、わかつてをります。」と、おのぶはもう聲に憤りの響きをまぜて、「あのお谷がいけないのでございます。あの人は若様を憎んでゐます。自分の腹から出た半次郎様に、なんとかしてあのお家をつがせたいたくらみがあるのでございます。私は若様をおかばひするといふのでお暇になりました。あゝ、あれはちやうど若様がお八歳の時でした。私は自分の乳でおそだて申した若様を、あのお屋敷へ殘して去ることが。どんなにつらかつたことでございませう？それ以來、なにかにつけ、若様のことが心配でございますから、お屋敷へおうかゞひいたしますと、私が若様にわるい智慧でもつけるやうなお考へで、はやく歸れよがしのおあつかひでございます。それでだん〳〵おうかゞひする數もへらしました。若様がさうやつて御成人遊ばしたので、唯今では暑さ寒さのお見舞ひにあがりますだけでございましたが、近年ではいよ〳〵私のおうかゞひいたすことが、お氣に召さないらしいお顔でございました。きつとあのお谷が……」

「これ〳〵、おのぶ。家の恥を、この繁華のなかで。」

東吾は苦笑した。思はず聲高になつたおのぶは、ハツと口をつぐんだ。

「まあ、私としたことが、御免遊ばしまして。」

と、おのぶが頭をさげた時、

「やあ。私の財布が無い！」

ひとりの、中年の店者らしい男が、うろたへたやうに懐中をさぐつた。

彼は最前から、お玉の美しい姿に見とれて、立つてゐたのだつた。

「あつ、紐が切れてゐる。す、す、掏摸だ！」

彼は叫んだ。

東吾はまたあの男ではないかと、混亂しかけた群衆を見やつた。その間に、お玉は顏にも似合はぬ、不敵な微笑をチラと母親のおのぶに閃めかしたが、おのぶはあはてゝ眼で制した。

拔けぬ罪科

かうしたところで立話もできませぬ、とにもかくにもと、おのぶが東吾を案内して、つれて歸つた家は、淺草河岸の「湊屋」といふ船宿であつた。

こゝが彼女の住居で、亭主は重藏といふ、四十を三つ四つは越えたと見ゆる人物。小肥で、鼻筋のとほつた、青髭の濃い、いかにもこの稼業むきの如才なさと齒切れよさをもつた男であつた。

おのぶが東吾をひきあはせると、彼は慇懃に疊に手をついた。

「しよつちう嬶あがお噂いたしてをりやすので、お身の上、お人柄、よつく存じあげてをります。おはじめてお眼にかゝつた若樣とは申されやせんくれえに。」

實直らしい言葉で彼は笑つた。

東吾は挨拶をかへした。が、彼もこの重藏といふ人物は、なんだか既知の人であるやうな氣がした。べつにどこかで見かけたといふわけではない。おのぶが屋敷を去つてのち或る男と夫婦になつたことはわかつてゐたが、彼女は自分のそれからの生活について、つひぞ東吾に話したことはないのであつた。かうした船宿の内儀になつてゐることも今日はじめて知つたのである。だから重藏にも、まつたく初對面なのである。しかし、どうもはじめて會つた男ではないやうな氣がしてならぬ。たとひはじめて會つたにしても、この男の聲には聞きおぼえがあるやうな氣がする。太い沈んだ聲――幅のある氣力の籠つた聲――どうも、この耳で聞いたことがあるやうだ。不思議である。――東吾は思はず重藏の顏を見なほした。

東吾と同じ心でか或は偶然でか、重藏にも妙にこの新來の客の姿を見なほす眼があつた。

「おい、おのぶ。若様になにかさしあげろ。わしもおちかずきのお盃をいたゞきてえ。」

ふたりの視線が合つた時、重藏は氣を變へるやうにかう命じた。そして、

「こんな稼業で、手狹な住居でごぜえやすが、奥の八疊でゆつくりお話をうかゞひたうごぜえやす。……おい、お玉。お前もなにをぼんやりしてゐるんだ。ほかならねえお客様だ。料理は女中まかせはならねえ。お前も行つて、臺所を手傳ふがいゝ。」

と、襖の脇に坐つて、膝の上に、自分の指を玩具にしながら、東吾と父との間にかはされる言葉を、さもめづらしげに聞き入つてゐるお玉を、やさしく叱つた。

「あい。」

お玉は、なぜともなく頰を染めた。小走りに臺所の方へ行つた。

そこでは、おのぶが外出の着物のまゝ、襷がけで、下女を指圖してゐた。

「あたしにも手傳つてこいつて。」

と、お玉はいつた。

「なにがお前にできるものかねえ。」

おのぶは笑つた。

「でも、おとうさんにいひつけられたのだもの。あたし、なにをしよう？」

「お前はつひぞ皿一枚拭いたことのない、ねんねえぢやないかね。」

「あら、またおつかさんはねんねえだつていふ。さつきもあの若様の前で、ねんねえだつていつた。あの時はきまりがわるくつて、あたし、どうしようかと思つたのだよ。」

うらめしげな眼をするお玉へ、おのぶは笑みかけながら、

「どう？　若様は？　御立派だらう？」

「えゝ、御立派だわ。あの方をおつかさんはおそだて申したのね。」

「さうだとも。」と、おのぶはほこらしげに、「わたしの乳をさしあげたのだよ。お死亡りの先奥様は、それは〳〵御縹緻のよいお方だつた。思ひやりのあるおやさしいお方だつた。そんなお方だけにお脾弱だつた。あの若様は、男振りは先奥様ゆづり、そして、勇ましい御氣象と強いお力は、お死亡りの殿様ゆづり。――だから、同じお旗本のどの若様にくらべたつて、決してひけは取らない、申分なしのお方だよ。」

「さう……ね。ほんとうに御立派な若様……」

お玉はちよつと襟のなかに頤をうづめた。

「あゝ、若様は鯛の刺身と、烏賊の甘煮がお好きだつた。お杉、お前大急ぎで、魚鐵へ行つて、註文してきておくれ。わたし達もお招伴するから四人前だよ。生のいゝのをつてね。」

おのぶは下女にいひつけた。

下女が出てゆくと、お玉は、柱に脊を寄せて、

「こゝへお連れする途々で、おつかさんと若様とお話を聞いてゐたが、若様はもうひと月もまへからお屋敷をお出になつてゐるのではないかねえ。これからどうなさるおつもりなんだらう？」

「困つたことだ。」と、おのぶは手を働かせながらしみりして、「わたしはあとでおとつゝあんに相談して見ようと思ふ……」

「どういふ相談？」

「お聞き申せば若様は、御親類にもお友達にも身を寄せてゐらつしやるのではない。その日〳〵の旅籠泊り。それでは先が續かない……」

「だから？」

お玉は柱をはなれた。

「わたしとしてお眼にかゝつた上は、このまゝにしては置けない。いゝえ、お眼にかゝらなくとも、お屋敷をおたち退きなすつたと知つたら、さがし出してこゝへお連れするのが、わたしでなけりやならない……」

このおのぶの言葉を、お玉はうれしげに、

「ぢやあ、若様をこゝへお置きするのかねえ。」

「お前と乳兄妹のお方――わたしの御主人だものを。」

「あゝ、それがいゝよ、おつかさん。おとうさんはきつと承知なさるよ。きつと。」

しかし、おのぶは、ちよつとあたりに氣を配つた。聲を落した。

「――だが、わたし達の大事な内實――これを、若様にさとられてはならない。ましておとうさんにはむかしの兇狀――」

この時、勝手の戸口が、ソツとそとからひらいた。

「姐御、姐御。伊太郎だよ。」

のぞきこんだ顏は、さつき東吾が兩國で捕へたあの掏摸だつた。

「あ。」

と、お玉は緣に出て、なにやら合圖のやうな手を振つた。

「さうかい。お客かい？　ぢやあ、またの時にしよう。あばよ。」

首をひつこめると、戸をしめてバタ〳〵と走り去る雪駄の音。

おのぶはいまさらの罪科を悔いるやうに溜息ついた。

「船宿といふのは表むき、わたしが囮になつて、毎日のあの稼ぎ……いま〻では結句面白がつてゐたけれど、なんだか嫌になつたねえ……」

もどつたお玉もかるく唇を嚙んだ。

「おとつゝあんは、あのとほり足を洗つて地道にこの商賣でたつてゆかうとしなさるのだが、子分の奴等が承知しない。いまでは抜きさしならない手まとひになつてしまつた……」

おのぶはホツとするやうにいつた。そして沸きだした鍋の蓋を、あわて〻とり除けた。

誰の名

東吾はその日から、船宿湊屋重藏の家に身を落つけることになつた。

「飛んだ厄介者として」「困つた居候として」と、彼は笑つた。が、重藏もおのぶもお玉も、心から彼をもてなした。二階の六畳と四畳半が、彼の居間にあてがはれた。船宿といふものは、單

に遊船を仕立るだけが稼業ではない。小酌低唱粋客と歌妓の樂しい逢曳きにも利用されることが多い。だから二階の座敷はつねにあけて置かねばならぬ。それを東吾に提供したのである。いはば商賣を犧牲にした歡待ぶりなのである。劍道にのみいそしんでゐた武骨な東吾には、そこまではわからなかつたもの〻、おのぶが乳母であつただけのことで、毎日朝から誂への料理で大事に遇せられることは、いかにも心苦しかつた。

「どうもこんなにされては困る。わしはこの家の者として置いてもらひたいのだ。なにかわしにできる仕事でもあつたら、遠慮なくつかつてもらひたいのだ。竿は三年艫は三月といふ諺もあるが、艫ならば少々心得もある。あの屋根船くらゐわしでもあつかへるがな。」

と、彼は、食事の時、膳を運んでくれるお玉にいつた。

「まあ、飛んでもないことを。若様はわたくし達の大切なお客様でございます。かうしていつまでも〳〵こゝにおいでくださりますなら、父も母も、わたくしも……どんなにうれしいことでございませう。どうぞ、お心置きなく、御逗留くださいまし。」

お玉は給仕しながら微笑んだ。念入りに化粧した顏は、輪廓と陰影のひとつ〳〵をあざやかにして、いかにも美しかつた。

「しかし、かう二階にとぢこもつてばかりゐては退屈千萬だ。」

「父は、若樣がお屋敷をおたち退き遊ばした御事情を承りまして、まだ當分は、あまり外出を遊ばさぬやうにと申してをります。」と、お玉はチラリと東吾に眼を向けたが、「若樣の御退屈……わたくしのやうな者のお話し相手では、その御退屈をお消し申すことができませんけれど。」

「いや、なに、お玉殿の話し相手なら、願うてもないことだが、わしはとんと芝居、遊藝などに無案内な男でな。」

「そのやうなものばかりが、船宿の娘の話の種ではございませぬ。」

「ほう。では、どんな面白い話があるかな。」

――もう半月ばかりの滯在で、東吾は彼女にからかふやうな言葉もいへるのだつた。

「お聞かせいたしたいお話も……お聞きいたしたいお話も……あるのでございます。」

「ほう。わしに聞きたい話？　武骨なわしにお玉殿へ聞かせる話があるであらうか。」

「澤山ございます。そのなかでも一番お聞きいたしたいこと……」

お玉は眞劍らしく膝を乘り出したが、そのはしたなさに氣がついて、かるく笑ひまぎらせた。

「ふむ。一番わしに聞きたいこととは？」

東吾は食事を終へて、茶をすゝつた。

「若樣が、どんなお嫁さまをお迎へ遊ばしたいかと申すこと……」

「なに、このわしが嫁を？　はゝゝゝゝ。辰野の家を永劫に去つたこのわしに、どこから嫁のくれ手があらうか。はゝゝゝゝ。」

「いゝえ、いゝえ、ございますとも。若樣のやうな御立派な……」

「無祿、無役、ゆきどころもない旗本崩れが、どう御立派だらう。はゝゝゝゝ。」

お玉はかぶりを振つた。なほなにかいはうとした。――が、その時、階下で妙に喧みたつやうな聲がした。

「ふん、お前さんが茜の三次なら、俺あ赤痣の勘吉だ。子分は子分でも、腕つ骨の太さじやあひけは取らねえ――」

「まあ……」

その聲を耳にしたお玉は、一瞬、東吾に對して氣を兼ねるやうに眉を寄せた。

「きつと船頭達の爭ひごとでございませう。ちよつと行つてまゐります。あの人達と申しましたら、みんなあゝした亂暴者で……」

と、彼女は一禮して、いそいで下りて行つた。

すぐ、聲はしづまつた。

東吾はひとり坐つてゐたが、ふと或る不審が胸にうかんだ。階下には重藏やおのぶがゐるはずである。それをお玉が制しに行つて、どれだけのたしにならう？　いや、しかし騒ぎはをさまつた。お玉の美しさが、荒くれた船頭達を支配する魅力となつてゐるのかも知れぬ。大方さうだらう。――かう、彼はうなづいたが、この不審からまたつぎの不審が生じた。

自分は船宿といふもの〻實際は知らない。だが、船宿といふ以上は、この家に船頭の二人や三人は泊つてゐなければならぬ。ところがこの家にはそんな男氣はない。たしかに三艘の屋根船はもつてゐる。客もあるやうだ。が、客あるごとに船頭は、いつもどこからかやつてくる。また、彼等は折々重藏とおのぶに、なにかせまるやうなものいひをする。夫婦はそれをおだやかになだめてゐるが、その語調のなかに、當惑と、狼狽の氣持のあることが、二階から漏れ聞いてゐても感受できる。しかも夫婦はできるだけ自分を、船頭達にあはせぬやうにしてゐる。これも不審の一つだが、そればかりでない。いまの聲で聞いた「茜の三次」とは誰だらう？　船頭達は、ともするとこの名を口にする。けつしてそとに響くやうにどなりはしないが、三度四度ならず自分は

二階で耳にした。不審はまだある。入りかはり〳〵來る船頭のなかで、こんなことをいつた者もある――

「やつぱり仕事あ、たあ坊つていふ囮がゐてくれなくちや……」

「おらあ屑屋になつてよ、あの屋敷の構えはよく見屆けといたから……」

「姐御は姐御、親分は親分、二手の仕事で儲け放題なんだが……どうして近頃あ仕事に身を入れねえんだか……」

これ等は、途切れ勝ちに聞いたものを、自分が、筋の通ずるやうに綜合したもので、底の意味あひは汲みとれないが、その汲みとれないところに、かへつていぶかしいものがある――

東吾はひしと唇をひき締めた。

お玉があがつてきた。

「父にお金を貸せつて申すのでございますの。賭博をいたすのでございますよ。ほんとうに困つた人達で。」

お玉は或る不安をかくすやうに笑ひ足した。

「さうだつたか。」と、東吾も笑み迎へたが、「お玉殿、聞きたい話も聞かせたい話もあるとお

冷飯　いひだが、そこでわしの方から聞きたいことがあるが……」

剣　「おや、それは、どんなお尋ねでございませう？」

法　なにか東吾の質問にうれしい豫期をもつやうに、お玉はまぶしげに瞬いた。

「茜の三次といふのは、やはり船頭達のなかのひとりかな？」

「えつ……？」

お玉は息を呑んだ。その頬はサツと血の氣を失つた。——が、

「はい……お、仰有る通りで……ござ……います。」

懸命に、彼女はこたへたのであつた。

救はれ同士

その日から、お玉の動作はおど〳〵してゐた。東吾の胸のうちを讀みとらうとするがやうに、彼女は祕やかながら、するどい視線をチラリと走らせた。しかし東吾はむしろ屈託のない濶達な態度を持しつづけた。お玉ばかりでなく、おのぶにも重藏にも、彼はさらにほがらかで磊落だつた。

しかし、彼ひとりになると、ジツと腕を組んでしきりに考へこんでゐた。始終階下の氣はひに注意した。ことに所謂「船頭達」が詰めかけてゐるらしい時には、滿身を耳にするがやうに、梯子段の降り口までしのび寄つて聞き入つた。

夕飯がすむと、彼は「腹ごなし」と稱して毎日外出した。そして大抵は亥刻（午後十時）頃には歸るが、時として子刻（午後十二時）をすぎて、ブラリともどつてくることもあつた。好きな道場通ひもできぬいまの身の上、二階にこもつてゐては折角鍛へた筋骨を衰へさせるばかりだから、遠歩きしたといふのである。——

冷飯　「親分、今夜こそあおれ達のために一つ働きしてもらはにやあならねえ……相手は大名屋敷だ……親分の得意な仕事だ……」

剣　この言葉を聞きのがさなかつた東吾は、かるくニタリと笑つて、その夕も「腹ごなし」の外出

法　をした。

その同じ夜更——

「どうすることもできねえ。あゝ、わしはいまぢやあ子分の奴等にひつぱたかれて、泥沼の深み

を追つたてられる牛なんだ。」

みづからあはれむやうに苦笑しながら、悲しげに見送るおのぶ、お玉をあとに、重藏は出かけて行つた。

それとゆきちがひに東吾が歸つてきた。彼はいつもよりさらに〳〵快活だつた。

「遠歩き——深川八幡へ夜詣りと洒落れて、あれから砂村隱亡堀まで歩いた。さひはひお岩の戸板にはぶつつからなかつたが。」

と、おもしろげに笑つた。

お玉のついだ茶をうまさうにのんで、二階にしかれた布團にはいつた。

——と、間もなく重藏がもどつてきた。どうしたものか、彼の顏は眞蒼だつた。

「おい、酒だ。酒だ。」

彼はいつた。なにごと起つたらしいと直感したおのぶは、聲低くきいた。そして重藏から耳にさゝやかれた言葉に、おのぶも「えつ？」と顏色を失つた。おのぶの震へる唇から耳語を受けて、お玉も「まあ」とばかり仰天した。

一ヶ月の後、重藏はまた子分の三四人から「仕事」を強ひられた。その夜も東吾はまつたく明朗に、謠曲さへ口誦みながらもどつてきた。そして間もなく重藏が、眼を血走らせて駈けこんで

きた。おのぶもお玉も、また重藏の耳語に聲を呑んでおどろいた。——

「姐御！　あ、あつしやあもうあの商賣はおやめだ。今日つから草鞋をはく。江戸に二度とけえつてこねえ。で、なくちやあ、あつしの生命がねえ。あつしばかりぢやあねえ、いままでの仲間——庄太の野郎も、宗吉の野郎も民造の野郎も出かける。あつしがみんなにかはつてお暇乞ひにきたよ。」

かう、旅仕度の男が、身柱をゾク〳〵させながら、重藏の勝手口に立つたのは、それから十日もたゝぬ或る午後だつた。男は、あの掏摸の伊太郎だつた。

「親分の方の、赤痣の勘吉をはじめ、お角力權太も、鎌鼬の丈助も、百貫の竹も、眼潰しの長七も……みんな不思議なあの黑い魔風のやうな武士の刀にかゝつたにちげえねえ。實あ、おれ達もそいつにねらはれた。巾着切だといふので、商賣をやめて二度と江戸の土を踏まなきやあゆるしてやると約束をとられた。上役人や岡つ引をおそれもしねえおれ達だが、あの武士——黑え布で顏をかくした武士はおそろしい。日のあるうちに今日江戸をはなれる約束なんだ。もし愚圖ついてゐたら芝あたりで夜になつて、バツサリだ。あの武士は、きつと、どつかゝら俺達を睨んでゐる。品川へ出るまであ安心ならねえ。氣が急くからこれでおさらばだよ！」

あたふたと、彼は走り去つた。

その夜――東吾がまた例の「腹ごなし」から歸つてくると、なんと思つたか重藏は、おのぶとお玉についてこいと眼くばせして、二階へあがつて行つた。

「や、今夜は少々疲れた。品川まであるいたのだからな。はじめは腹ごなしのつもりだつたが、考へて見るといゝ修業だ。刀をつかふには脚を強く、したがつて腰の強いことが肝腎だ。刀は手で使ふのでない。脚と腰だからな。」

と、東吾は上機嫌に笑つた。

「若様、そのお腹ごなしも御修業も、今夜でおやめなすつてよろしうございませう。」

重藏はひとつ大きく頭をさげながらいつた。

「なに、足固めは剣法の……」

「いや、若様、みな存じてをりやす。」重藏は疊に手をついて、「若様の厚いお志。この湊屋重藏、別の名は茜の三次、たゞ涙を流してお禮申しあげるばかりでございやす。」

東吾は石像のやうに身動きしなかつた。しづかな瞳の光を重藏にそゝいだ。

「……さうか。わかつたか……」胸に組んだ腕を解くと、手を伸ばして東吾は重藏の右手をつか

んだ。「重藏、その禮はわしからもいはねばならぬ。わしもお前に救はれた――生命を救はれた――三ヶ月前の晩に――な。」

「えつ。若様、では……？」

顔をあげる重藏へ、東吾はうなづいて、

「姿は見なかつた。が、あの晩の聲はこの兩耳に澱りついて忘れはせぬ。起きよ、眼をさませ、と申したあの聲――わしは、おのぶにお前をひきあはされた時、はてなと首をひねつた。そのうちお前と話すのが重なるほど、そしてお前の正體がわかつてくるほど、いよ〳〵あの晩、雨戸のそとから氣をつけてくれた聲の主だと知つたのだ。」

「たしかに私でございやす。」と重藏は苦笑した。「子分の奴等に強ひられて、盗みに入つた茜の三次、奥座敷へ忍び足にめえりやすと、おつかさんらしい老けた女のひそ〳〵聲で、離座敷にねむつてゐなさる東吾つてえお方をだまし討ちにする密談。ひでえ奴だとムカツとして、仕事を投げ、庭へ飛びだすなりお居間の雨戸へ口を押しつけたのでございやす。それがおのぶのお育て申した若様だつたゝあ。なんといふ因縁深えお話……」重藏はこゝで後を振りむいたが、「おのぶと申せば、この女、あつしがこんな素性の人間たあ知らねえで夫婦になりやした。ふたりの間

にできたお玉も、巾着切の囮になつて……あゝ、私は憎んでも憎み足りねえ大悪人……しかし、若様、あなた様にお乳をさしあげましたおのぶは、清淨潔白な女でごぜえやす。さしあげたお乳は、濁つたり汚れたりしちやあゐやせん。こればかりは、おのぶも申譯がたつと存じやす……」

しんみりした重藏の言葉。袂を嚙み、袖を顏にあてゝ、はげしい歔欷に耐へるおのぶとお玉の姿は、哀れに、いぢらしかつた。

「はゝゝゝ。申譯の立つの立たぬの――おのぶは、どこまでもわしの乳母だ。そして重藏殿、お前はわしの生命の恩人――お玉殿は――」東吾はキツと、形を正して泣き伏してゐるお玉を見やつたが、いかにもあかるく晴ればれと、「いまは、たゞ身も心も美しい娘さんだ。ゆくゆくはわしの妻にもと所望したいやうな――」

ハツと、お玉は顏をあげた。自分の耳を疑ふやうに――涙を忘れて――

重藏は強く疊に額を打ちつけんばかり、頭をさげた。そしてうれしさ、難有さに聲も出ないで惘然としてゐるおのぶへいつた。

「おい、酒だ。酒だ。――酒だ！」

いつしか彼も男泣きに泣いてゐるのであつた。

切髪妻

義理人情はいつの世にも變りはないといふが、江戸時代のそれは、現代人から見て、甚だしく形式に走りすぎてゐるやうに思はれもしやう。歌舞伎や淨瑠璃や浮世草子や讀本の類に現はれた義理人情は、その誇張と虚飾とのために、まつたく傀儡化されてゐるとさへ感じられる。

しかし、また考へ直して、これらの義理人情は、この時代の極度に束縛されたる社會制度、家族制度の上からは、當然のものであり自然のものでもあつた。われわれから見て「形式」に過ぎてゐても、彼等の場合には、もはや「本質」であつたのである。

江戸期の義理人情を傳へてゐるいかなる書きものでも、常に形式道德の讃美であ

る。したがつて取扱はれた人物は、善と惡との類型的な對照である。なんら人間的な性格の叙述はない。事件の偶然性が要素となつてゐるだけである。本篇は文政三年の寫本から材料を得たものであるが、當時はことに馬琴の勸善懲惡主義が行はれてをり、この寫本の筆者もそれにかぶれてか事實を多分に作爲してゐる。場所といひ人物といひ近松の「心中宵庚申」をも想起させる話である。

師の恥辱

遠州氣賀宿から、濱名湖畔、猪の鼻瀨戸へ出やうとする姫街道は、松並木の望景で名のあるところ。

初夏の、やゝ焦性を帶びた落日が、棘々と射し込んでゐる樹影をくゞるやうに、しつかと足どしらへした中年の武士が、見るからに筋骨たくましく右肩をそびやかしては、時々なにか思ひ出すやうな冷笑を唇尻に浮べながら、大股に歩いてゆく。

「お待ち願ひたい〳〵。」

——と、突然、うしろから、砂塵を蹴あげて走つて來た一人。

「ふむ？」

武士は振り返つた。——息を切らして、汗みづく、髪は亂れ、着物ははだけてゐるが、顏色の白い、眉の濃い若侍。

「貴殿は倉澤總之進殿か。」

「む、いかにも倉澤だが。」

「拙者は戸坂周藏門弟、山脇多三郎と申す。」

「むゝ。」この名乘りを聞くなり、武士はキツとなつたが、相手の優形なのを、まづ與しやすしと見てとつたか、さあらぬ體に、「御道場へ忘れ物いたしたかな。思ひ出さぬが……なにを忘れたか……」

「いや、左樣なことではござらぬ。拙者は貴殿がお歸りのあと、一足ちがひに道場へ參つた。玄關先にて委細のこと承り、たゞちにあとを追ふて參つた。」

「ふゝゝ、左樣か。しからば御身は？」

「是非ひと勝負お願ひ申したうござる。師匠は今春より中風の氣味にて病臥、それを、わが腕を

恐れて假病つかふか、卑怯者奴と罵詈雑言を受けたとあつては、門弟の一人、山脇多三郎、いかにも無念と心得申す。」

「むう、山脇といふ年若けれど師範代を勤めてゐる仁が居られるとは聞いた。それが御身であつたか。」

「他の門弟ども、貴殿から思ひ切つたる稽古を受けたと申す。拙者も是非この場にて。」

「それは殊勝だ。が、こゝでは竹刀、木刀など間にあはぬが。」

「無論、眞劍。」

「はゝゝ。眞劍は、身にあたると斬れるものだが、御承知か。」

「承知いたす。眞劍勝負は生くるか死するかの二つと申すことまで。」

「はつはつは！　よい覺悟だ。」

「お手柔らかにとは――お願ひいたさぬ。」

「おもしろい。」

編笠をかなぐり棄てゝ、スラリと引抜く大刀。

「御免。」

若侍も抜き合はせた。

「えい！」

「おう。」

互ひの切先が、示威と壓倒と、まづ機先を制すべくヂリ、ツと寄る。

「えい！」

倉澤と呼ばれた中年の武士は、すくなからずギョッとした。山脇の一刀は、まだ一合せぬに、鋭い氣魄を現はしてゐる。ピタリと正眼に動かないが、底氣味のわるい自在な變化をかくしてゐるのが察せられる。

「えい！」

倉澤はしかし傲然と一喝した。

「おう。」

冷やかに應ずる山脇。

「小癪な！」

氣息に詰つてはと、倉澤も劍士として自信にみちた人物。先手を取るべく踏み込む一閃。

「やつ！」

しかし、山脇も積極的に突いて出た。ハッと飛びさがる倉澤――もう、額に脂汗があつた。

いらだつて眞向におろす倉澤の大刀、身をひねつたかと思ふと、山脇の鋭鋒はのびて、右の小手へはいつた。「あつ！」と、ひるんだ瞬間を、すかさず半圓を描いた一刀は、左の肩口へしたゝか割りつける。

「むゝむつ！」

のめりながらも、文字通り死物狂ひの執拗さで、大刀を振らうとしたが、小手の深傷は、もうその力を與へなかつた。

「師の恥辱を返すのだ！」

今まで押へた憎みと怒りを、こゝでむしろ殘忍に爆發させて、山脇は敵の胸を蹴つた。よろめく隙を更に一刀。ザクリと横なぐりに。

「無念！　小童！」

のたうち廻る倉澤へ、一氣の留めを刺した山脇――

「師の恥辱を返すのだ！」

唾でも吐きかけたいやうに、彼は罵つた。

拾ひ子

――大阪長堀に、備前屋久兵衛といふ材木屋。八間間口の手廣い商賣をして、店は養子の榮藏が番頭仙助と心を一つに、律氣な働き振りを見せるので、繁昌をつゞけ、久兵衛はもう樂隱居していゝ身の上。しかもこの人の眞實さと溫篤さは、同業仲間からも畏敬され、町内からも信頼されてゐるのだが、妻のおせきが甚だしく評判が惡い。意固地で不愛想で高慢で、しかも邪智深い。

「佛の旦那に、途方もない鬼の嬶衆や。」と、誰も彼もいふ。

「備前屋さんともあらうもんが、あれだけは一生の思惑ちがひ、死なれたお内儀は、まこと釣りあふたお方であつたが、あの嬶衆になつてから、あの家には暗い影がさして來た。お店はいよいよ御盛んやが、それだけが人間の幸福ちうものではない。」

「ほんに、そのとほり。金のたまるばかりが幸福にはならん。考へて見れば、備前屋さんは氣の毒なお人。後繼者ちうても、お梶さんはもと〳〵拾ひ子。それを自分の娘にして榮藏さんといふ

養子。謂はゞ身上はあかの他人の手に渡る。」

「いや〳〵、お梶さんと榮藏さんは、どつちもよう出來た若夫婦。あれだけの嫁婿なら、血はつゞかいでも、備前屋さんの大幸福や。わが實の子でも、あゝした揃ひの孝行者はめつたにはあるもんじやない。——たゞ、なんといふてもあの鬼の嬶衆が、あのお家の難儀や。」

「根が下女からなりあがつた女だけに、禮儀作法を知らんのは、無理もないとゆるして置いても、あの邪慳と慾垢煩惱は！」

かうした噂が、おせきの耳に入らぬ筈はなかつた。

「なにもかも、お梶の仕業。いまゝでに育てゝやつた恩も忘れて、わしを惡う觸れまはるのや。憎い奴、義理知らず。あゝ、今に榮藏の代になつたら、それこそいよ〳〵のさばりくさるやろ。久兵衞殿はわしより二十も年上、今年で六十五の、さきの壽命はわかつてある。久兵衞殿が死んだら、わしはあいつにこの家をいびり出されるにちがひない。お梅や、親身の味方といふたらお前一人。なんでも今のうちに——な。」

瞼が黑ずんでゐるため、一層ギロリと鋭く光つて見える眼を、彼女はそばでモグ〳〵麥こがしを喰つてゐる、鼻の平べつたい、顴骨のいかにも意地惡げに聳えた女にむけた。

「叔母はん、わたしやいふても、榮藏はんを、これほど思ひこんでゐますのやもんな。色が白うて眉が濃うて、役者にもない男振り。もと〳〵お武士やつたゞけに、第一品が高い。あの人を置いては、わたしの旦那はどこにもない。一所懸命にやりますわいな。」

「その惚れた人に、そないな麥こがしを喰うてる色氣のないとこを見せてはならん。お前の惡いのは、喰ひ意地や。なんぼ京の着倒れ大阪の喰ひ倒れちうても、程らいのあるもんや。榮藏の前では、せい〳〵綺麗ごとに見せんことにはな。お梶はなんちうても縹緻よし、榮藏も惚れてゐるその仲を割かうといふには。」

「えゝ、縹緻ではかなはん事は知つてゐますわ。わたしは高の知れた曾根崎女郎あがり。」

「これ、うつかりとそないな話を。——誰に聞かれんでもない。わしはえゝ家柄の生れやとなつてをるんやからな。たゞ世が惡うて、この家に奉公したことにしてあるんやからな。……縹緻はかなはいでも、十九の年からまる三年、器用につかうた手練手管、男をよろこばす法は、お梶なんぞの知らんこと。それがお前のえらい力や。えゝか、な。」

「それは誰にもひけを取りまへん。お職も張つたことのあるこの手腕に、縒をかけて、これからちやつと……」

「武士あがりで智恵もあらうが、情には脆い榮藏の氣質や。」

「そこへ叔母はんの口上手で、わたしに加勢してくださるならなあ。」

「うまいこと榮藏をものにして、お梶を追ひ出すことができたら、死ぬほど惚れたちふお前も幸福、わしも幸福。」

「叔母はん、さうなつたらこの身代は兩人のまゝ。眼の保養、口の法樂、なんなりと贅澤放題して貰ひましよ。」

「それが大けなあてや。あかの他人のお梶より、血のつゞいたお前の可愛いのんは當り前や。」

「そのわたしが、叔母はんをいよ〳〵阿母はんと呼ぶことになつたら、母親大事は當り前や。」

「孝行してお呉れ。」

「わたしの思ひをはらさしてお呉れやす。」

おせきとお梅は、うなづき合つて笑ふのだつた。

夫婦星

良人の額に沈んだ影の宿つてゐるのを、お梶は早くも見逃さなかつた。

「あなた、どうなされたのでございます。今夜は妙に浮かぬお顏を。」

「先程、母さまに御酒をすゝめられた。飲けぬ口を強ひられてちつと過ぎたのらしい。はゝゝ。」

しかし、榮藏の笑ひには苦しい調子がまじつてゐた。

「さやうでございますか……」

「この頃は、とんと陽氣になられたさうで、お梅さんを酌の相手に、面白い在鄕唄まで出る。よい御機嫌で結構だ。父さまは、もう眠られたか。」

「はい。今までお離座敷で、弓張月を讀んでお聞かせ申しましたが、すや〳〵とお寢みなされました。」

「それはなにより。——母さまとちがふて、靜かに本をたのしまれる父さまだ。夫婦してこのやうに御兩親をおなぐさめ申すことは、なんよりの話だ。」

中庭の雨戸を閉て切つた八疊は、このむつまじい若夫婦の居間。行燈のやはらかな灯影をうけながら、しなやかな指先で鬢の後れ毛を搔きあげるお梶は、榮藏にとつて、こよない美しいものであつた。

「旦那さま……」

憂はしげにお梶は口籠つた。

「むゝ？　なんじや」

「旦那さまは、もと濱松の御家中で、立派なお家柄。わたくしは素性も知れぬ拾はれ兒……」

長い睫毛がさゝへかねて、ポロリとこぼすと滴。

「はゝゝ。また埒もない事！　お前はこの備前屋の養女、わしはその入婿に來た人間。式どほり見合ひもして、双方に異存なうて夫婦となつたのじや。わしは、あの父さまの子としてのそなただと知つてゐればよい。」

「おうれしうございます。わたしはどのやうなことがあらうと、あなたの妻でございます。」

「もとよりじや。」と、榮藏はいたましくうなだれたお梶の肩へ、ソツと手をかけたが、「縁あつて夫婦の契りを結んだふたり、この世はおろか、先の世までも——」

「有難うございます。お嬉しうございます。」

聲を漏らさじと袖をくはへて泣き入るお梶——その哀れな心持は、榮藏に充分汲めてゐた。

義母のおせきの、日增につのる邪智と無慈悲。今夜も部屋へ呼びつけて、酒を勸めながら、お梶の讒謗惡罵である「素性も知れぬ拾はれ兒」とは、繰り返し〳〵いはれた言葉。おとなしらし

うよそほふても、あの女は腹黑い。養父の好人物なのに取入つて、とうからわしを邪魔あつかひ、お梅を呼び寄せたのは、あの女が給仕する膳の物に、毒でも混ぜられてはかなはぬから——と、まで、恐ろしいことを平氣で口にした。そして、一方お梅の眞實さをほめそやした。縹緻こそ劣れ、性質はお梶に較べて雪と炭、人間はみめかたちより心立てが肝要。しかもお梅はれつきとした庄屋の家柄の娘に生れた。あんなどこの馬の骨ともわからぬ女は、武家に生れたお前が連れ添うて、恥にこそなれ、なんの譽れ。離別るものなら一日も早く離別つたが、お前の身の德。

——

「さあ、お梅、榮藏さんに酌してあげるがよい。」

「えゝ、それでも、お梶さんに。」

「わしのいひつけや。遠慮することはない。」

「それでも……」

「はゝゝゝゝ。榮藏さん、見なされ、育ちは育ち、こない初心にあかい顏をして、しほらしい娘やないか。」

と、殊更つゝましくあどけなくよそほふお梅を、仰々しく感心して見せる養母のおせき——榮

藏は、わざと酒をつぎこぼして、驚いたさまに、自分の膝にもたれかゝらうとしたお梅の、蟲酸の走るやうな、不快なしぐさを思ひ出した——

「あなた、一日店のお疲れが……明日にさはりませぬやう、お寢みなされませ。」

「おゝ、お前も。」

「わたくしは、ちよつと父さまのおみ足をおさすりして參ります。この頃は冷えますせいか、御持病の骨痛み。眠つておいでなさりながら、隨分お苦しさうでございます。お擦り申しあげると、さもお心地よさゝうに、鼾をお立てなされまして。」

「おゝ、それはよいことじや。行つてくるがよい。わしは横になつて……お前の歸りを待つてゐよう。」

「お持ちくださいますか。」

「夫婦じや。」

その言葉を、うつくしい上にも、うつくしく微笑して、お梅はそこに敷いた蒲團の、良人の枕の位置をうれしげに直した。

臍の緒書

——天滿から堂島、北島、江戸堀と、一日の懸取に、かなり疲れて灯し頃、やうやく店に戻つた榮藏は、忠實な番頭仙助の、彼の姿を見るなりあわたゞしく、帳場格子へ手招きしての耳打ちに、やゝ驚いて、足音をしのばせながら、庭石づたひに土藏の脇を迂廻して、奥の離座敷の縁にあがつた。

「なにもかも、わたくしのいたらぬ粗相でございます。どうぞお許しなされまして。」

ひたすらに詫び入る聲はお梶だつた。

「いたらぬところ？　これがいたらぬところちふ謝罪ですむと思ふてか？　なんといふても、わしの身に怪我させようと企らんで！　お梅が早う氣がついたからよいやうなもんの、もしさうやなかつたら、それこそわしの生命が……」

唾みつける聲はおせきだつた。

「これ、なにもそのやうに大仰なもののいひやうを。」

情をもつてかばふ聲は、養父の久兵衛だつた。

榮藏は、ほの暗い夕闇のなかにも、自分の影の工合に注意しながら、小窓の障子に身を寄せた。

「大仰なものゝいひやう？　これが大仰ですかいな。あゝ、恐ろしや〳〵、風呂の湯加減を見てくれといふたら、それ幸ひに、湯の中へ、物もあらうに剃刀を落して置いて――湯の中の斬り傷は、血にとめどがなうて、生命取りやとされてある。わしはこれほど仇敵にされてるとは知らいで、今までお梶に頼んでゐたが、もう〳〵今日かうわしの身の廻りはお梅一人まかせや。飯も菜も汁も、恐ろしうて、お梶に運んでは貰へん。」

「剃刀が風呂のなかに落ちてあつたとは……なんばう、お梶が自分の口で粗相やと詫びたにしても、どうも不思議ぢや。お梶ほどこまかい心を働かす女子はないとわしは思ふてをるに……お梶どうして……？」

「父さま。わたくしも一向わからぬことでございますが、現在お湯加減をみましたのはわたくし。ほかにどなたにも罪のありさうな……」

「罪の、あり、さうな？　ありさうな？　これ、その言葉は人を疑ふ言葉やな。それでは、剃刀を見つけてくれた、このお梅の仕業とでもいひなさるのか？」

「まあ、おせき。」

「いゝえ、聞きずてなりまへん。お梅はわしの親身の姪。わしを大事にすればとて、そのやうな企らみを、どういふ譯あつてすることやろ？　これ、お梅、お前疑はれてをるのやぞ。なんとかいふがえゝ。」

「叔母はん、それはあんまりや〳〵！」

わざとらしく泣き聲を立てるお梅。かさにかゝつておせきは意地惡げに罵りはじめた。

「これ、お梶。お梅はあないものもいへんくらゐ口惜しがつてをるよつて、わしは叔母として、この子に代つていひますぞ。この子はお前と違うて、氏素性のたしかに、素直に育て上げられた娘ぢや。お前のやうな……」

「待て、おせき。」伊兵衛の聲は、カツとなつた「このお梶はわしの子ぢや。わしが育てあげた子ぢや。しかも氏素性――家柄に生れた子ぢや！」

「ほう面白いお話や。拾はれ兒になんの氏素性？　なんの家柄？」

「それをお前達にいふ要はない。」

「はゝゝゝ、いふ要はないでなうて、いへる譯はない――のやろ。」

伊兵衛の聲は興奮した。

「お梶は立派な武士の家柄に生れた子ぢや！　仔細あつて拾ひ兒といふことにしてあるが、生れて二歳、物心つかぬところをわしが貰ふた貰ひ兒ぢや！」

「えつ？　父さま……？」

「お梶。決して嘘ではないぞ。」

「しかし、わし連には嘘やな。」

「もう、お梶の生家も絶えた今日や。誰に言ふも憚りはない。お梶は播州姫路の藩中、倉澤總之進様といふ、無念流の手利きの娘ぢや！　臍の緒書きも添へて貰ふた、わしの貰ひ子ぢや！」

そとの榮藏は、なぜか、ハツとよろめいた。

「さあ、これでこの子の氏素性、家柄にお前達がなんの口もはさめまい。剃刀についてもわしに詮議の法がある。お梶はたゞおとなしう自分に罪を着てをるが、わしには飽くまで腑に落ちん話。湯のなかに剃刀とは、ちつともつともらしうない筋書き。それを手輕に見つけたとは、お梅はえらい眼先きの利きやうぢや。」

「えつ。」

「備前屋一家に起きたことは、この久兵衛が一切の審き役ぢや。わしの詮議のしようによつては、またどこから妙な怪我人が出やうも知れぬこと。」

「さぞ芝居で見るやうな、えらい大岡裁判が出來ますことやろ。さあ〳〵、お梅、部屋へ行つてわしは生命びろひのお祝ひ酒や。」

ふて腐れた低い笑ひに立ちあがるおせき。――榮藏は、素ばやく庭へ下りた。

三つの誓

「無間地獄――」

その夜更、久兵衛の離座敷で、兩手を疊につきながら、呻くやうにいつたのは榮藏だつた。

「おゝ、まつたくの無間地獄でござります。――武士を棄てましたも、その姫街道の松並木、倉澤氏を打果したによりますこと。もとより私事のうらみでない。たゞ恩師の恥辱をすゝがんための、武士の意地ではござりまするが、因果はかくもめぐつて、現在妻のお梶が、倉澤氏の娘であらうとは！　あゝ、この心持、まつたく無間地獄に墮ちる苦しみを味はひました！　幼少より劍難の相あるとかで、兩親はわたくしを僧籍に入れんと願ひましたとか。兄は、濱松の家中と姫路

の藩中に、確執の起ることあつてはと憂ひまして、ひそかに私を大阪へ落し、そのまゝ商人の道を學ぶやう、かねて知りあひの、この家へ預けられましたが、御縁あつて婿舅の杯をかはし、名も備前屋榮藏と相改めましたが、今日が日まで、知らぬこととはいひながら、敵同士お梶と夫婦——あゝ、恐ろしいことでございます。」

久兵衞は分別と慈愛にみちた白い眉を、しづかにひらいた。

「お梶を貰ひ受けたのは、倉澤様の奥様であつた、おみち様と仰有る、お梶の母御からであつた、その時は、西宮の生家にお歸りなされてをられた。倉澤様は、なんでも御氣象の荒々し過ぎる、劍道には達してをられたが、慢心のお强かつたやうに聞きました。なんでもおみち様は御離別になつて、生れた子が男なら引取らう。女ならば勝手にといふお話であつたさうなが、生家のお方達も、決して倉澤様をよくはお噂せられなかつた。しかもおみち様は、お梶様をお產みなさると、間もなく御自害。——それは倉澤様の無情をおうらみなされたとか、產後に血の氣が逆上つて、狂氣同様のお氣の毒なお最後。かうした話をあの子に知らせては生涯暗い悲しみの種にならうと、兩親の名を隱すために、拾ひ兒として、わしが貰うてもどつた譯。しかし、一應はと臍の緒は添へて頂いた。立派な家柄に生れながら、氏素性ない拾ひ兒で育てるは、いかにも不憫な

ことながら、それでもさうした兩親のことを知らせるよりはこの方がましだと、今まで隱してゐたが、あのおせきとお梅の性惡が、そなたとお梶の仲に邪魔立てしやうと、素性のわからぬ女子呼ばはりすることは、聞かぬふりして聞いてゐました。が、今夜といふ今夜は、とう〳〵我慢なりかねて、うちあけた言葉——それが、そなたの耳にはいつたために、思ひがけない苦しみ惱みをさせるとは、なんとも詮ないことぢや。」

と、久兵衞はふたゝび、頭を振つた。が、

「しかし榮藏殿。この話は、わし達兩人の胸に忘れて、お梶には知らせともないと思ひます。お梶は心からそなたに貞節をつくしてをる。無間地獄など、いまはしい考へやうを棄てゝ、一切は宿世の因緣。お互ひにむつみあふてくださらば、却つてお梶の兩親もよろこばれる筈。たとへ打果したりとも、そなたのいふとほり、私事のうらみでなく、正しく武士道をまもつた互ひの本懷、なんの敵同士といふことがあらう。——どうぞ、この話はこの場かぎりに、お梶は飽くまでこの久兵衞の娘として、末長く添ひ遂げてやつてくださるやう。お梶はわしの娘ぢや。そなたはわたしの大事な婿、大事な備前屋の後繼者ぢや。」

老眼に押へきれぬ涙——榮藏は思はず手を取つた。

「親父さま！　もつたいなうございます！　刀を棄てゝ今は身體の肉も血も、商人になりきりました榮藏、意氣地とてはございませぬ。無間地獄と戰くも、敵同士と恐れるも、みんな商人の氣弱さとお察しくださいますやうに。」

「むゝ、それではわかつてくだされたな。」

「はい。わたしの生涯は、親父さまへ、阿母さまへ、またお梶へ――そして家業へ、心ひとつに。」

「頼みますぞ。」

堅く握り合つた二人の手は、強い感動に震へた。

「父さま、おみ足をおさすりにまゐりました。」

襖のそとで聲がした。

「むゝ、お梶か。すまぬなう。」

兩人はさあらぬ體にはなれた。

靜かにお梶がはつて來た。すぐ榮藏へ瞳をうつして、

「旦那さま、長いお話でございましたな。」

「……今日の懸先の勘定や、そのほか取引のことで、いろいろ御相談申しあげたので。」

榮藏は、微笑しやうとした。が、どう努力しても、顏の筋肉がこは張つてゐた。

「や、お梶、その髪は？」

久兵衞は驚いた。

「えつ……？」

榮藏も見直した。驚いた。――艶やかな丸髷は根もとからプツゝリ切られてゐた。

「お梶、お前……」

「わたくしは尼でございます。」

「えつ？」

兩人は息を呑んだ。

しかしお梶は淨くつゝましくいつた。

「この髪を再びむすぶやうなります間、わたくしは、わたくしのためにも、旦那さまのためにも弔ふ人がございます。また、その間に、わたくしの今まで足らはぬお仕へかたをして參りました阿母さまに、今日のお詫びのかなひますやう、一所懸命にお仕へいたしたう存じます。そして阿

母さまからも、旦那さまの妻として、よろこんでお認め頂けますやう力を盡したう存じます。」

「おゝ、お梶！」

「わたくしの弔ひの心が足りませぬあひだは、また阿母さまからおゆるしの出ませぬあひだは、この剃刀で、伸びても〳〵この髪を切りとほすつもりでございます。」

「おゝ、お梶。」

「父さま、我儘勝手に、あなたのお育てくださいました身體髪膚の一つを傷つけました不幸、そして旦那さま、あなたにさしあげましたこの心をよそに振りむけまする不貞——どうぞお許しなさりませ。」

「おゝ、では、わし達の話を？」

「いゝえ、父さまと旦那さまとは、懸先、取引の御相談。女のわたくしには、商法のこと、ついぞわからう道理はござりませぬ。」

「お、お梶！　よく言うた！」

伊兵衛と榮藏は、左右から摺り寄つた。

「父さま、おみ足をおさすり申しませう。旦那さま、今日はまたひとしほのお疲れでございます。お寢みなさいますやう。」

お梶は強い決意に、涙一滴こぼさなかつた。——

二年——それが、お梶の再び艶々とした丸髷に結ひなほすことのできた時間だつた。これは順調な時間だつた。彼女はあの剃刀を、一度も用ひる必要はなかつた。

邪智と邪惡のおせきの心は、既に最初の一年を終はらぬうちに、慈悲と慈愛を知る母親の心と變つた。お梅は在所に歸された。そして、おせきはむしろ彼女のはうから、お梶の黑髪の伸びることを待ちに待つやうになつた。

「いゝえ、阿母さま。その御心配はいりませぬ。あとの一年、まだわたくしの弔ふ心持が足りぬくらゐに存じます。」

さういつて、逆になぐさめるやうに、お梶は微笑した。

「改めて親子の誓ひ、夫婦の誓ひの内輪の祝ひを。」

二年目に、義父の久兵衛はおせきにいつた。

昭和十五年十月二十一日印刷
昭和十五年十月二十五日發行

【定價金壹圓五拾錢】

不許複製

著作者　畑　耕一

發行者　飯尾謙藏
東京市小石川區江戸川町十八

印刷所　萩原印刷所
東京市牛込區山吹町一九八

發行所　交蘭社
東京市小石川區江戸川町十八番地
電話小石川五二〇一
振替東京四〇二七九

水原秋櫻子　新選俳句季語解　金二圓
同　俳句になる風景　金一圓四十錢
同　句集　新樹　金一圓五十錢
同　俳句の本質　金一圓
同　自句自釋　わが俳句　金一圓廿錢
同　連作俳句集　金一圓廿錢
吉田冬葉　俳句の作方と味ひ方　金一圓五十錢
同　俳句作法七講　金一圓五十錢
同　子規の俳句と其一生　金一圓六十錢
伊藤鷗二　俳句及俳壇を說く　金一圓廿錢

交蘭社發行

臼田亞浪　定本句集　旅人　金一圓八十錢
同　俳句の第一門　金七十錢
飯田蛇笏　近代句を語る　金一圓五十錢
同　俳句文藝の樂園　金二圓
渡邊水巴　定本句集　白日　金一圓五十錢
小川千甕　新纂俳畫法　金二圓
岩田九郎　芭蕉文集の鑑賞　金二圓廿錢
伊東月草　俳句になるまで　金一圓二十錢
交蘭社編　現代綜合大句集　金一圓五十錢
同　現代名家女流俳句集　金一圓五十錢

交蘭社發行

加藤楸邨著

俳句表現の道

本書は俳句に志す人々のために、如何にすれば容易に、快心に表現し得らるゝかを、或は内的に或は外的に讀者の該心に觸れて、わかり易く表現の道を說き明かされたものである。

——内　容——

◇表現といふこと
◇内的表現と外的表現
◇主觀と客觀
◇季について
◇表現のリズム
◇作句に行詰つたとき
◇寫生に就いて
◇表現の技術
◇實例に觸れて
◇鑑　賞
◇初心者の爲に
◇俳句の研究室等々

——四六版紙裝金九十錢送六錢——

交蘭社發行

ペン毛筆兼用

俳句淨書帖

これこそ自己の藝術を永遠に語る

本書の特長と便益

一、四六判洋裝にて上布表裝美本函入
一、内容紙特漉和紙ドウサ引ペン毛筆兩用
一、口繪極美寫眞版挿入せり
一、自己句集として保存の爲め書名背文字は隨時書替貼付せらるべきやう空挿しあり
一、扉、各自が隨意書名記入せられ、或は先生に願ふも良き紀念ならむ
一、日記兼用として日日の俳句を淨書記念さるゝも可ならむ

斯くして自己が苦心の作品を完全に保存することは、忘失や撒逸を防ぐと共に反省を促し、進境の過程を悟り、或は子孫に傳へて自他の悅び絶大ならむことを確信す。

—四六版總布上製美本函入金一圓送料十錢—

交蘭社發行

星野武男　明治天皇御製新講　金一圓五十錢
谷馨　歴代名歌評釋　金一圓六十錢
尾山篤二郎　新講短歌の作り方　金一圓五十錢
吉井勇　歌集玉晴　金一圓七十錢
佐々木久　漢詩の作り方新講　金一圓五十錢
前田雀郎　川柳と俳諧　金一圓五十錢
久佐太郎　正風冠句新講　金一圓五十錢
西條八十　新詩の味ひ方　金一圓六十錢
同　詩歌要語辭典　金一圓二十錢
同　小曲詩集　靜かなる盾　金九十錢

交蘭社發行

長谷川伸著

史實小說　玄武館の人々

（四六版三百餘頁美裝　金一圓五十錢送料十二錢）

交發
蘭
社行

體制下小說を讀むなら先づ本書を……

――玄武館とは、幕末の劍豪千葉周作先生の道場名なり――

眞實を述することは、まことに難かしい。而もこれを津々たる興趣のうちに一讀全卷の終るを忘れしむるの迫力巧緻の麗筆に描き得るは、將にわが長谷川伸先生獨自の壇場である。

皇紀二千六百年、この榮ある秋に當つて、更に國史顯正の一端とし、また史實に卽しての正傳『玄武館の人々』一卷をおくる。

われ等の祖先が、その烈々たる意氣のもとに或は君國に殉し或は孝、信、義、情に身を滅して顧みざりし跡を探究考査すること多年、漸にして成る本書こそ、眞に時局下の最好讀書とし、且つ、史實小說の最高峰を示す良書と評されてゐる。

408
512

終